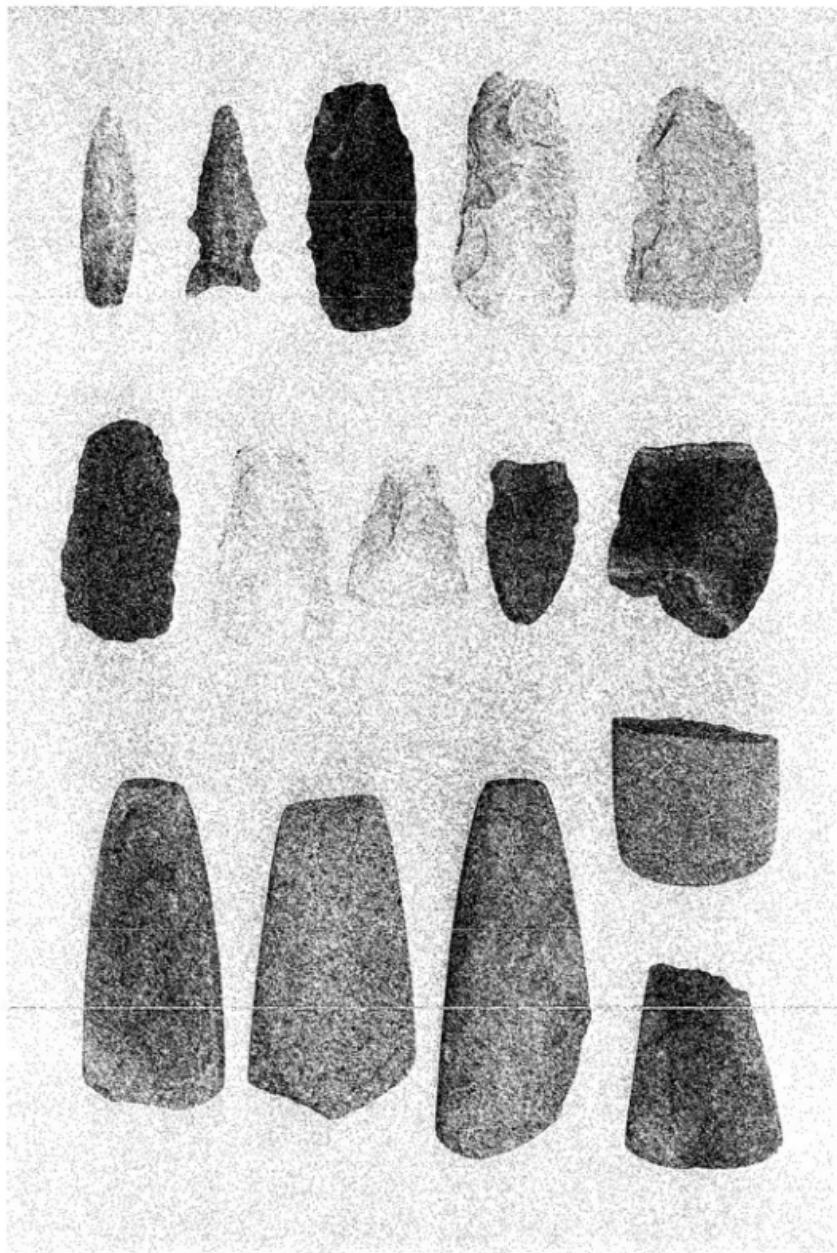


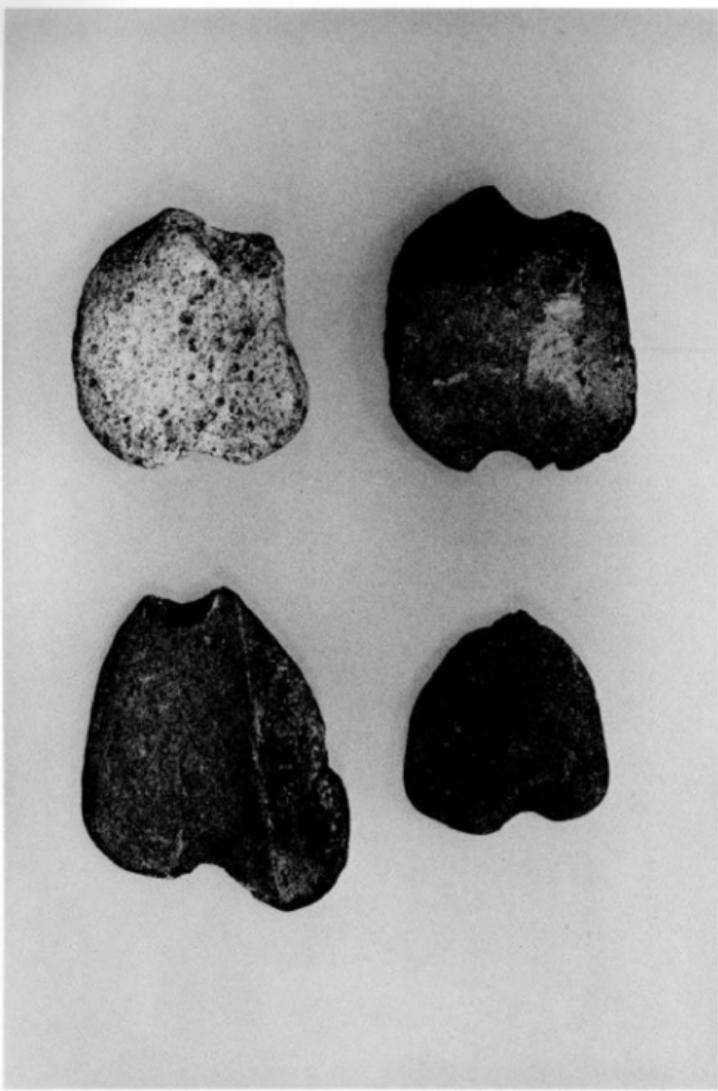
図版28 遺構外出土土器



圖版29 遺構內出土石器



図版30 遺構外出土石器



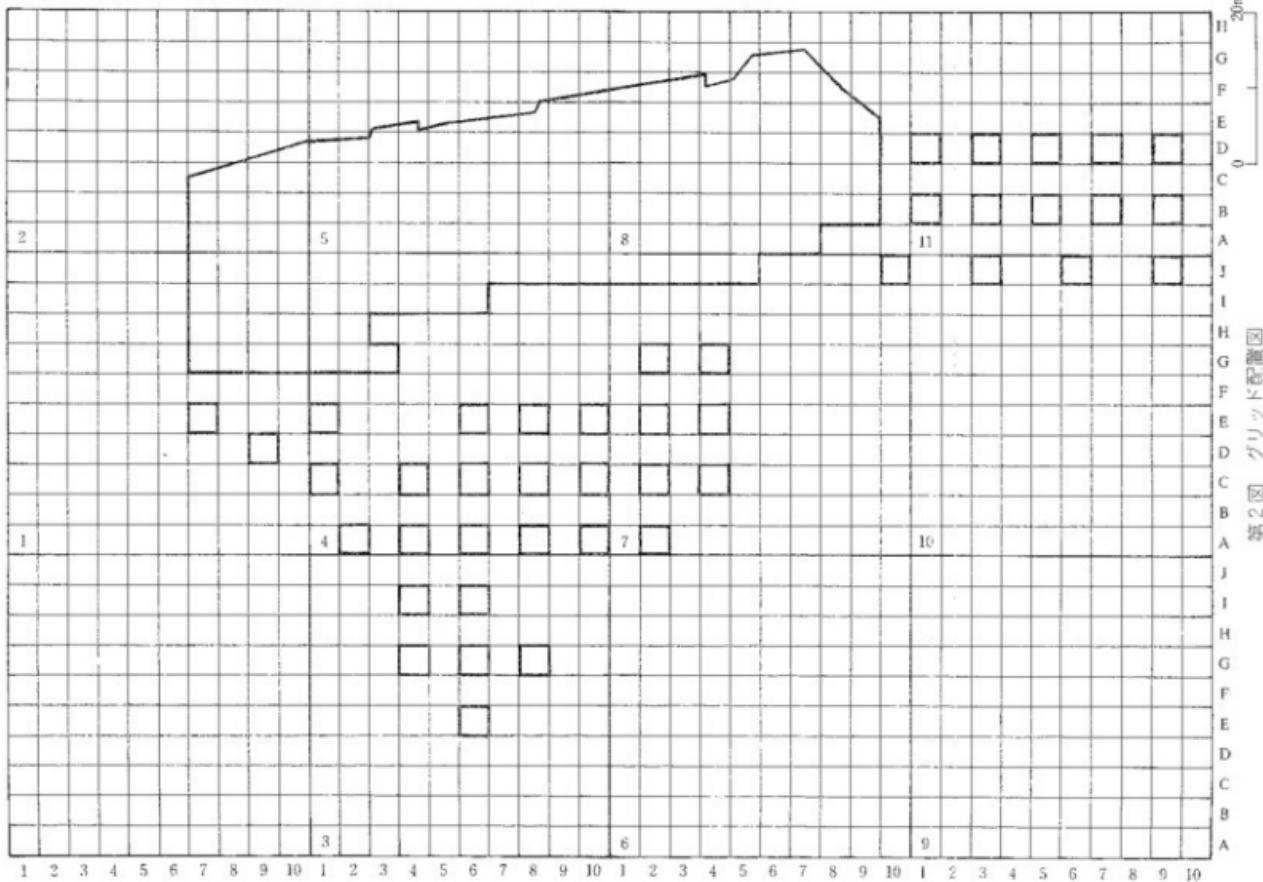
图版31 遗構外出土石器

下 堤 F 遺 跡



第1図 通跡周辺の地形

第2図 グリッド配置図



遺跡の概観

標高約41mの台地上に位置し、北側は大きな沢となっている。

遺跡は縄文時代前期末葉から晩期にかけてのもので、堅穴住居跡19軒、土塙18基が検出された。

縄文時代前期末葉から晩期の遺跡は、南東約300mに下堤G遺跡、東約350mに下堤E遺跡、西約700mに坂ノ上E・F遺跡などがある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区南西部で検出された。

プランは長軸5m、短軸3mの小判形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは12個検出され、主柱穴は6個と考えられる。炉は地床炉で、2基検出された。火熱を受けて赤変しているが比較的弱い。床はほぼ平坦で堅い。

出土遺物

土器（第31図29～35）

全て覆土出土である。細い粘土組を直線、円形、鋸歯状に貼り付け、半裁竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。35は連続爪形文を施さない。

石器（第40図1～5）

1は横型石砲、2・3は搔器、4・5は削器である。

2号住居跡（第4図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸2.9mの椭円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは5個検出され、主柱穴は4～5個と考えられる。炉は石壇土器埋設部、石組部からなる。石壇土器埋設部は深鉢形土器の下半部を埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第26図1、第31図36～38）

1は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。1は深鉢形土器の下半分で、地文はしR単路斜縞文（綫位回転）である。37は刺突を加飾する。

石器（第40図6）

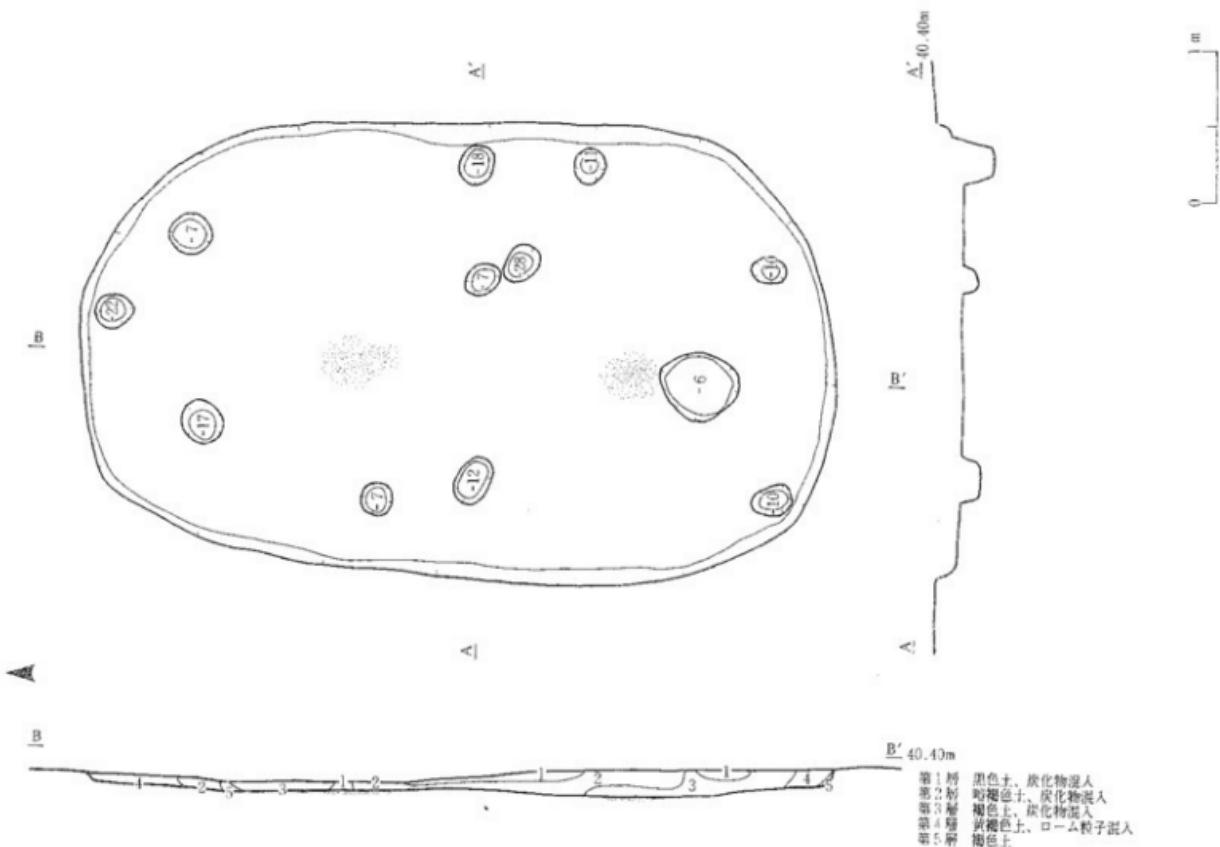
6は縦型石匙である。

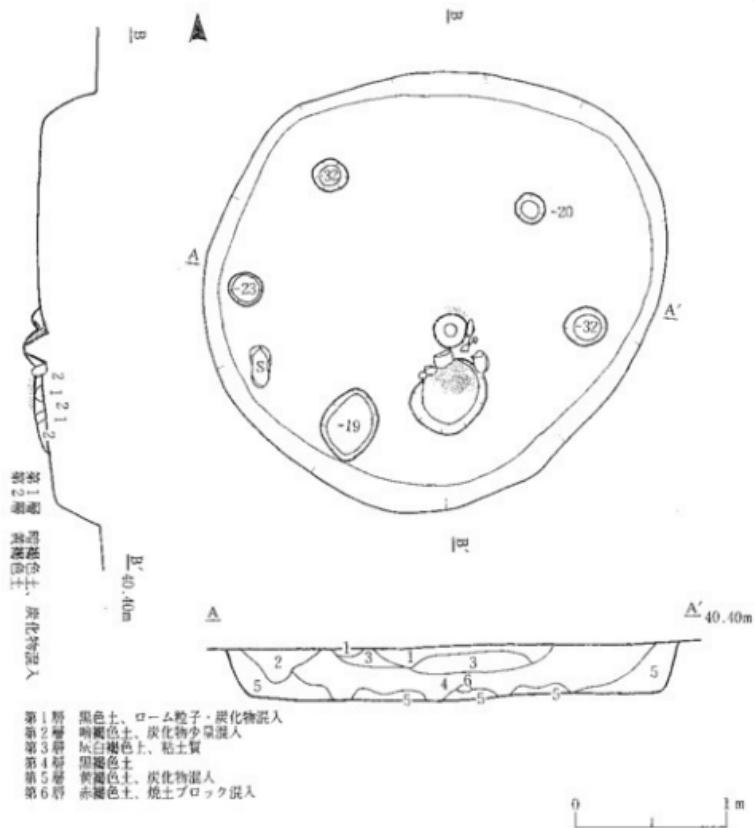
3号住居跡（第5図）

調査区西側で検出された。

プランは径5mの円形を呈し、13号土塙によって切られている。確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは8個検出され、主柱穴は4～5個と考えられる。炉は土器埋設

第3図 1号住居跡





第4図 2号住居跡

部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形上器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁に接する。床は平坦で、堅い。

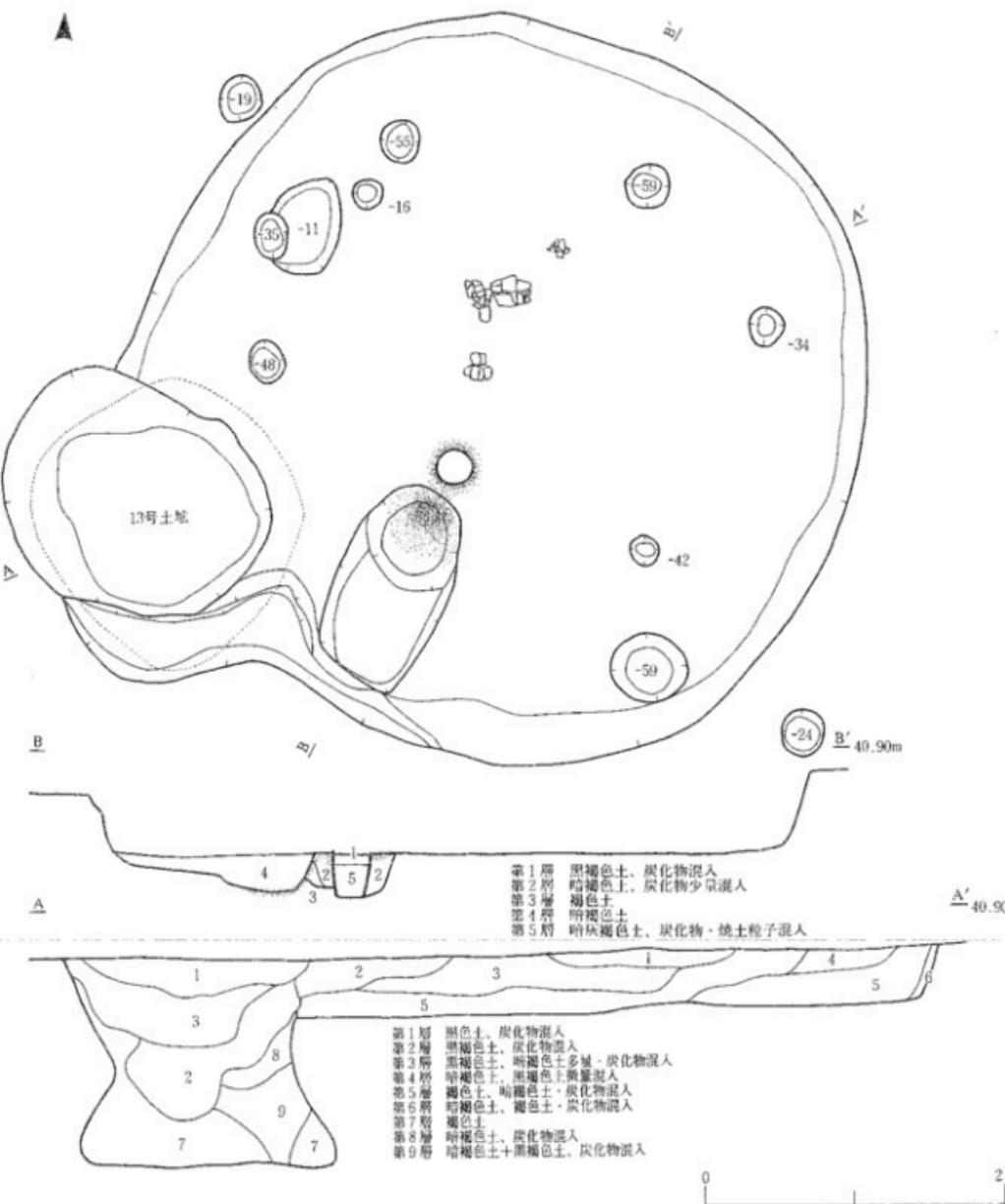
出土遺物

土器 (第26図2～5、第31図39～45)

2は炉埋設上器、3～5はピット、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。2・3は深鉢形上器で、地文は2がR L R複節斜繩文（縦位回転）である。4・5は口縁部が外反する深鉢形上器で、磨消帯は横位方向へ展開し、4の磨消帯には地文が残っている部分もある。

石器 (第40図7～11)

7～11は削器である。



第5図 3号住居跡、13号土塁

4号住居跡（第6図）

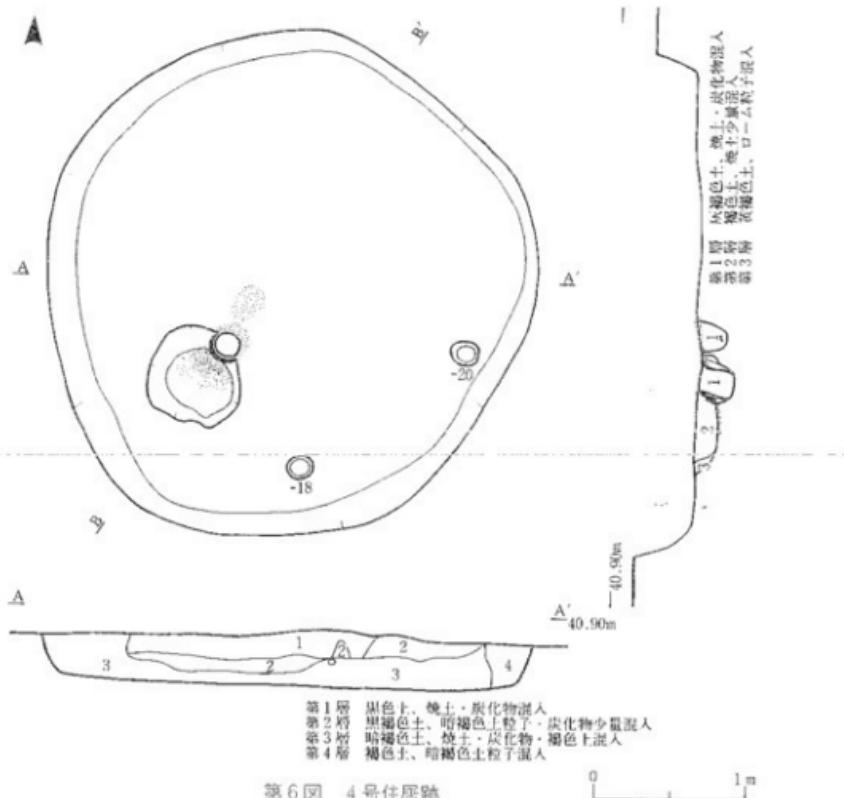
調査区西側で検出された。

プランは長軸3.4m、短軸3.2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2個のみの検出である。炉は上器埋設部、掘り込み部からなる。上器埋設部は作り替えが認められる。深鉢形土器を3重（中、外側が接合）に、若干斜位に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底、側面が火熱を受けている。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第26・27図6～8、第32図46～57）

6（3重の内側）、7（3重の中、外側が接合）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈縫区画の崩壊を有するものである。6は口縁部が外反する深鉢形土器で、地文はR L 単節斜繩文（継位回転）である。7は深鉢形土器で、地文は前々段多条と考えられる。8は口縁部がやや外反する深鉢形土器である。口縁部内部に4個の突起がみられ、地文はR L 単節斜繩文（継位回転）である。57は口縁部が「く」の字状に内屈する鉢形土器である。



第6図 4号住居跡

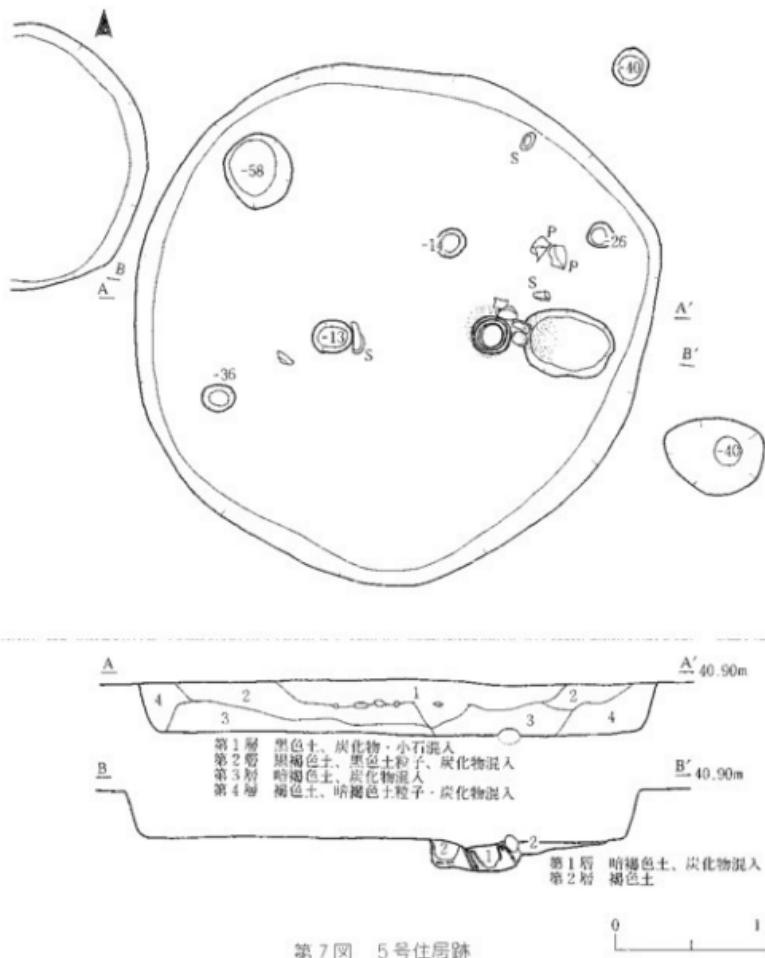
5号住居跡（第7図）

調査区南側で検出された。

プランは長軸3.5m、短軸3.4mの橢円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、規則的ではない。炉は石四土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は作り替えが認められ、深鉢形上器の胴部を3重（異体土器）に埋設している。周辺は火熱を受け赤変している。石組み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第27図9～11、第32図58～67）



第7図 5号住居跡

9(3重の内側)・10(3重の中)・11(3重の外側)は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、葉脈状文を施すものである。9は深鉢形土器の下半分で、胸部中程に沈線が確認できる。地文はL r無節斜繩文(縦位回転)である。10は口縁部がゆるく外反する深鉢形土器で、口唇部に突起がみられる。磨消帯に規則性はみられず、地文はL r無節斜繩文(縦位回転)である。11は口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、地文はR L原体による羽状繩文である。62は刻線による葉脈状の文様を施す。

6号住居跡(第8図)

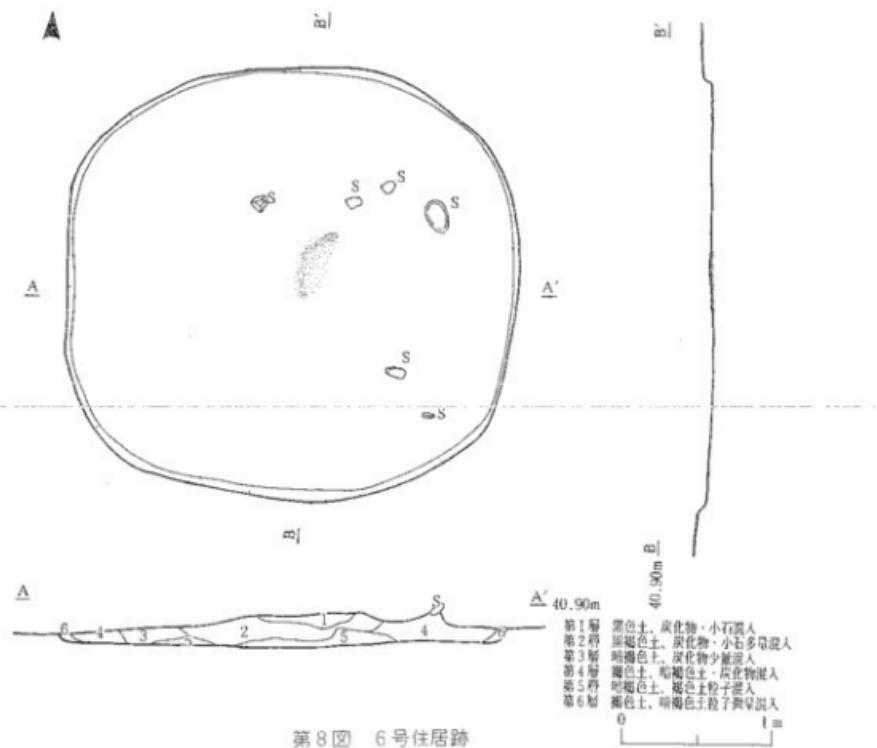
調査区西側で検出された。

プランは長軸3m、短軸2.8mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は地床がで、火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器(第33図68~72)

全て覆土からの出土である。68・69は沈線区画の磨消帯を有する。



第8図 6号住居跡

土製品（第39図1）

1は再利用土製品（円盤状土製品）である。

7号住居跡（第9図）

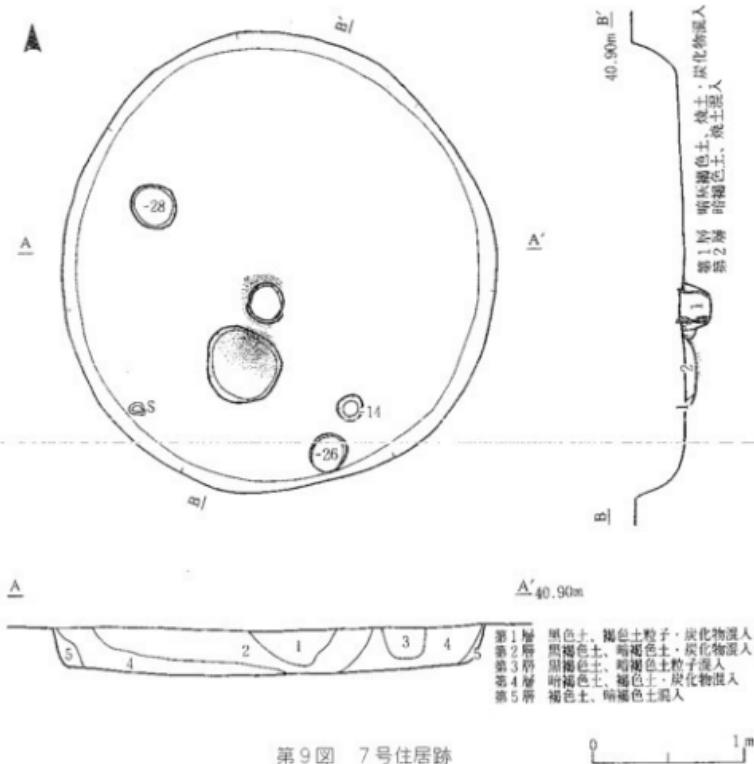
調査区西側で検出された。

プランは径3mの円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは3個のみの検出で、規則的でない。坑は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器（掘り込み部側に異なる土器を2重に埋設）を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第27図12、第33図73～76）

12は炉埋設上器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。12は口縁部が外反する深鉢形土器で、「O」字状の磨消帶を有する。地文はR.L.単節斜繩文（横位回転）である。



第9図 7号住居跡

石器（第40図12、第41図24）

12は搔器、24は石皿状石器である。

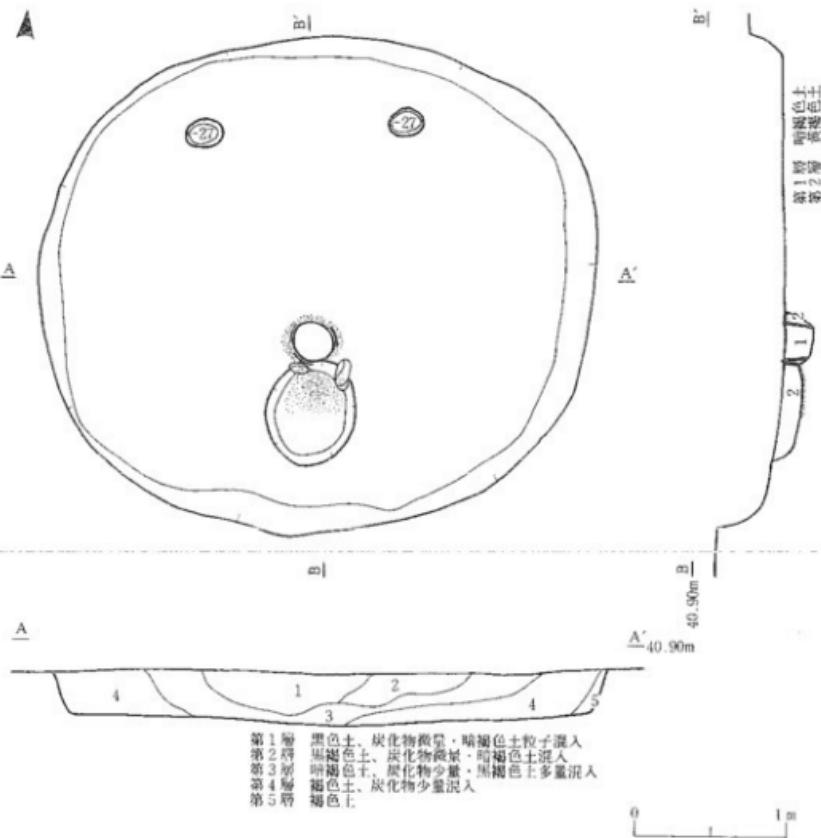
8号住居跡（第10図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

プランは径3.5mの円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2個のみの検出である。炉は土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を2~3重に埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けており側面の石が抜き取られた可能性がある。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第28図13~16、第33図77~84）



第10図 8号住居跡

13は炉埋設土器、14は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。13は深鉢形土器の胸部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。14は胸部が「く」の字状に内屈する鉢形土器で、地文はL R 単節斜縞文（縦位回転）である。15は綾線区画の磨消帯を施す。口縁部には相対して大・小4個の孔をもった把手が付く。孔は小が横に、大が横と縦に作られている。内面には赤色顔料が塗られている。16は口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。

石器（第40図13）

13は搔器である。

9号住居跡（第11図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸3.9m、短軸3.7mの椭円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7個検出され、深い掘り方の4～5個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は強く火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第28図17、第33図85～90）

17は炉埋設土器、88～90は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。17は深鉢形土器の胸部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。85には綾線がみられる。90は割目状撚糸文を施す。

石器（第40図14～16）

14は有茎石鏟、15は石錐、16は搔器である。

10号住居跡（第12図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸5m、短軸4.6mの椭円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出され、主柱穴は4個である。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の副部を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。

掘り込みは底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは堅くなる。床は平坦で堅く、部分的に焼けた痕跡がみられる。

出土遺物

土器（第29図18、第34図91～109）

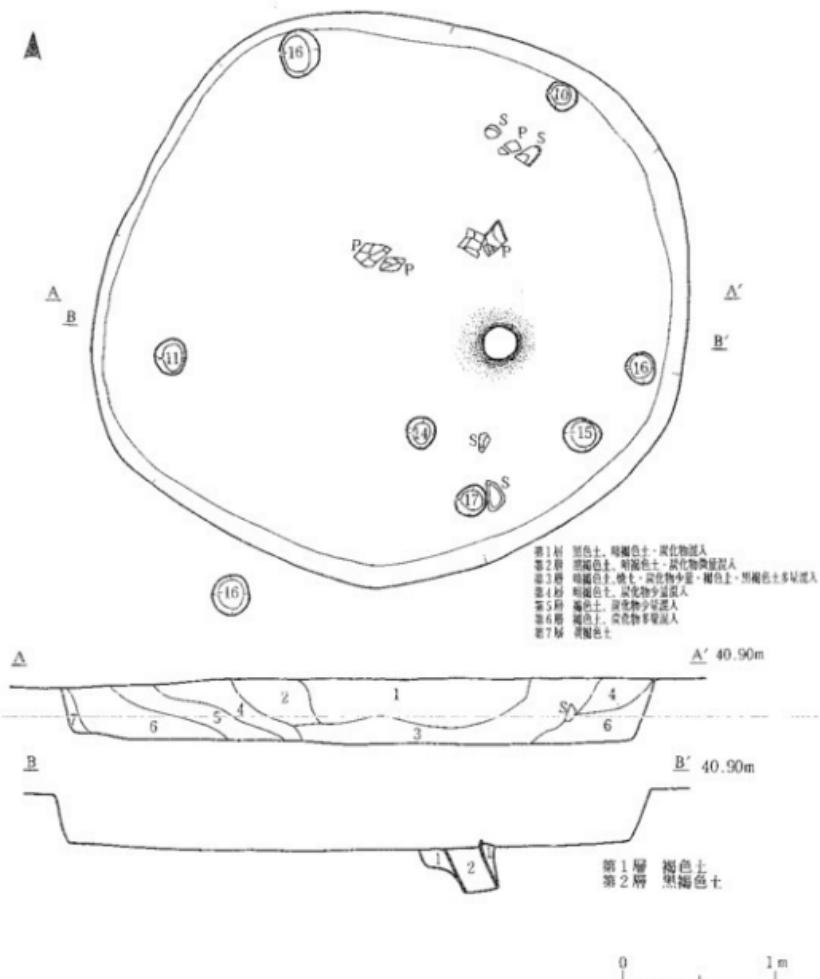
18は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。18は深鉢形土器の胸部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。96は把手部で、18・95には刺突が加飾される。

土製品（第39図2、3）

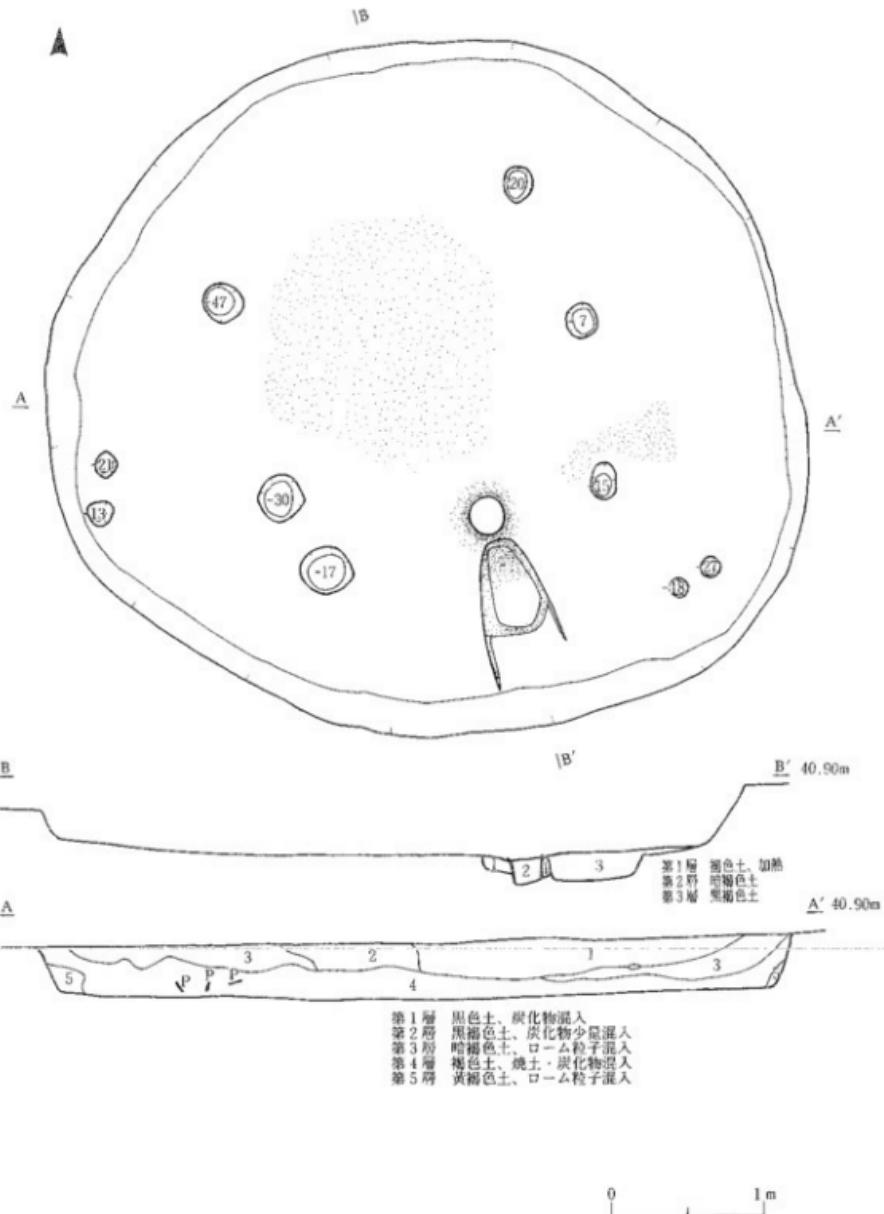
2・3は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第41図17・25・26）

17は磨製石斧、25・26は石皿である。



第11図 9号住居跡



第12図 10号住居跡

11号住居跡（第13図）

調査区南側で検出された。

プランは長軸2.2m、短軸2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1個のみの検出である。柱は上器埋設部で、深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第29図19、第35図110・111）

19は炉埋設土器、他は覆土出土である。いずれも地文のみの施文である。19は口縁部が外反する深鉢形土器で、地文はL R 単節斜縞文（継位回転）である。

12号住居跡（第14図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径2.5mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は土器埋設部で、深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

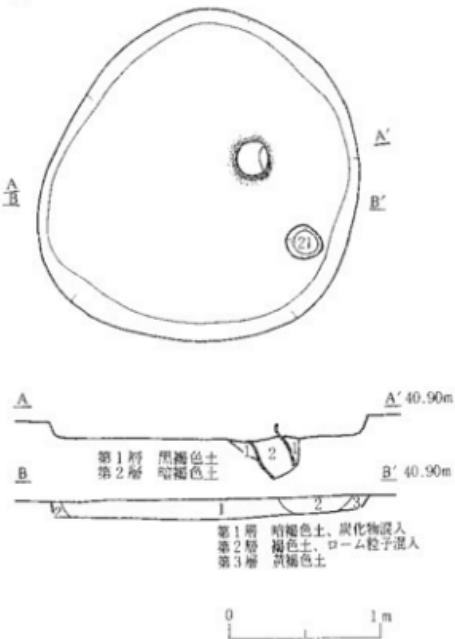
土器（第29図20・21、第35図112～114）

20は炉埋設土器、21は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。20は深鉢形土器の脚部で、「O」字状の磨消帯を有する。地文はR L 単節斜縞文（継位回転）である。21は口縁部が内湾する波状口縁をなす鉢形土器である。磨消帯を施した後に刻線を湾曲させて施す。

13号住居跡（第15図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径5.8mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは8個検出され、主柱穴は4個と考えられる。柱は上器埋設部、掘り込み部からなる。上器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は中央部が若干低くなる。



第13図 11号住居跡

出土遺物

土器（第29図22、第35図115～118）

22は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部に沈線を巡らし、磨消を施すものである。22は口縁部が外反する深鉢形土器で、L R 単節斜縫文（継位回転）である。

石器（第41図18・19）

18は縦型石匙、19は小形磨製石斧である。

14号住居跡（第16図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸3m、短軸2.6mの橢円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は土器埋設部、石組部からなる。上器埋設部は深鉢形土器の胴部を2重（同一土器）に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けている。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第29図23、第35図119～122）

23（2重の内、外側が接合）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線巡回の磨消帯を有するものである。23は口縁部が直立する深鉢形土器で、地文はL R 単節斜縫文（継位回転）である。

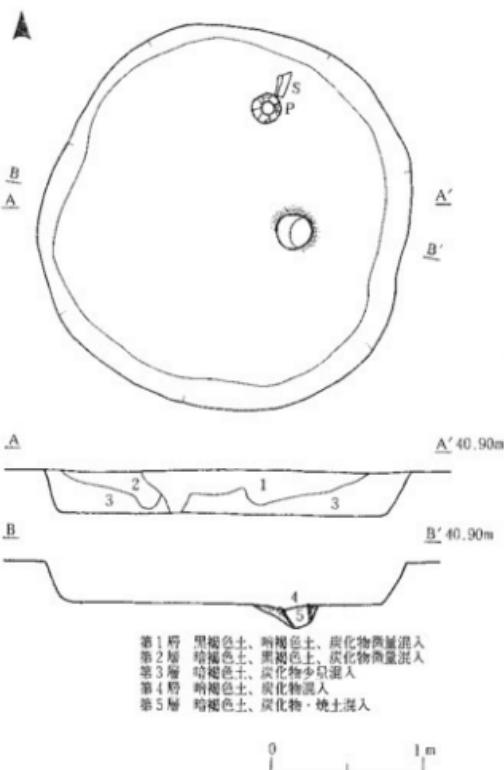
15号住居跡（第17図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径3mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは3個のみの検出で、規則的でない。24は石圓土器埋設炉で、深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土土器

土器（第30図24、第35図123～126）



第14図 12号住居跡

24は土器埋設上器、他は覆土出土である。24は深鉢形土器の胴部で、地文はL-R単節斜縞文（継位回転）である。123は沈線区画の磨消帶で、磨消帶を画する沈線の1本に刺突を施す。

石器（第41図20）

20は無基の石鏸である。

16号住居跡（第18図）

調査区北東部、沢の縁辺部で検出された。

プランは径4.2mの円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは3個のみ検出で、規則的でない。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半部を埋設し、周辺は火熱により赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。一段深い掘り込みは壁に接する。床は若干凹凸がみられる。

出土遺物

土器（第30図25、第35・36図127～134）

25は炉埋設土器、127は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。25は深鉢形土器の下半分で、地文は撚糸文である。127は口縁部内面に貼り付けによる突起がみられる。128は稜線がみられる。

石器（第41図21・22）

21・22は攝器である。

17号住居跡（第19図）

調査区東側で検出された。

プランは長軸3.1m、短軸2.7mの梢円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは検出されない。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を若干斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦で、中央部が特に堅くなっている。

出土遺物

土器（第30図26・27）

26は炉埋設土器、27は覆土出土である。26は深鉢形土器の胴部で、地文はR-L単節斜縞文（継位回転）である。27は口縁部がやや外反する深鉢形土器である。地文である撚糸文を施し、後に、角状に沈線区画の磨消帶を施す。磨消帶には部分的に地文が残る。

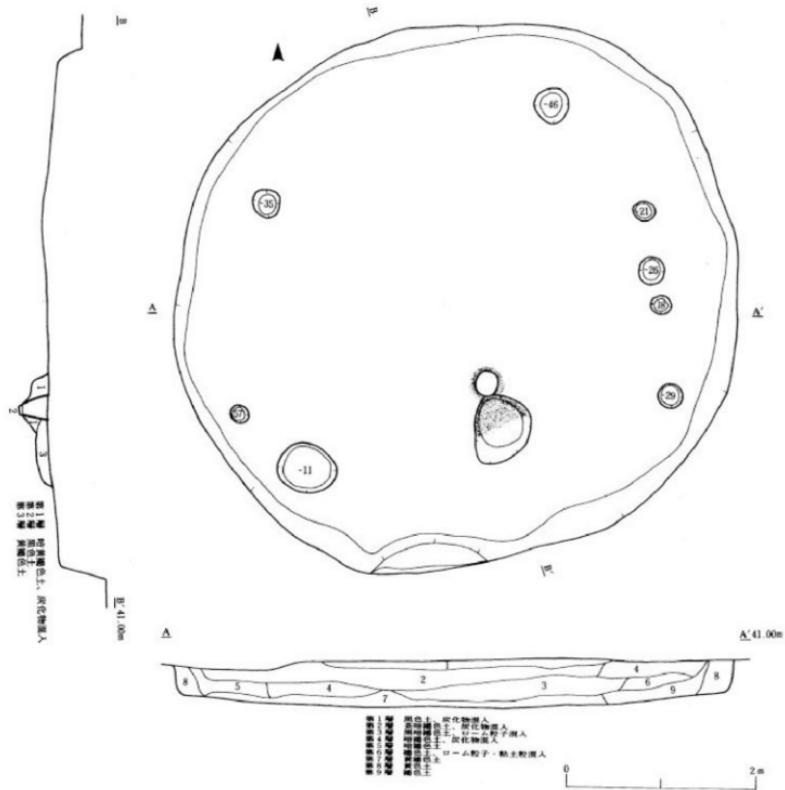
18号住居跡（第20図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

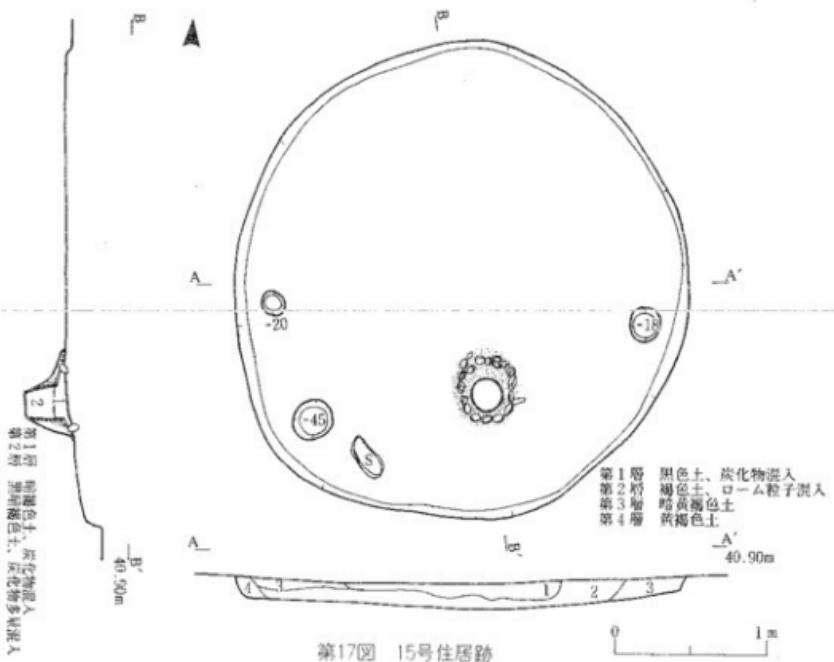
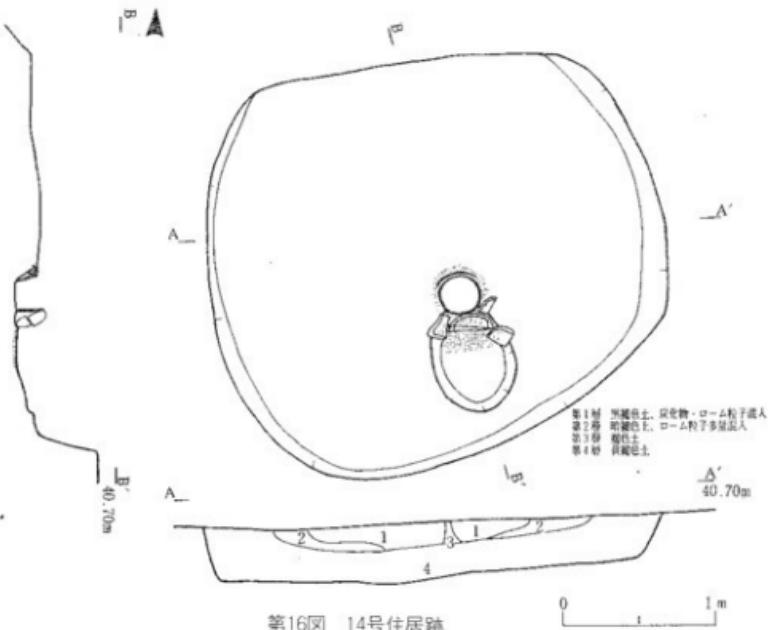
プランは径2.3mの円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット、炉は検出されないが、中央部に焼けた跡が認められた。床は若干凹凸がみられた。

出土遺物

土器（第36図135・136）



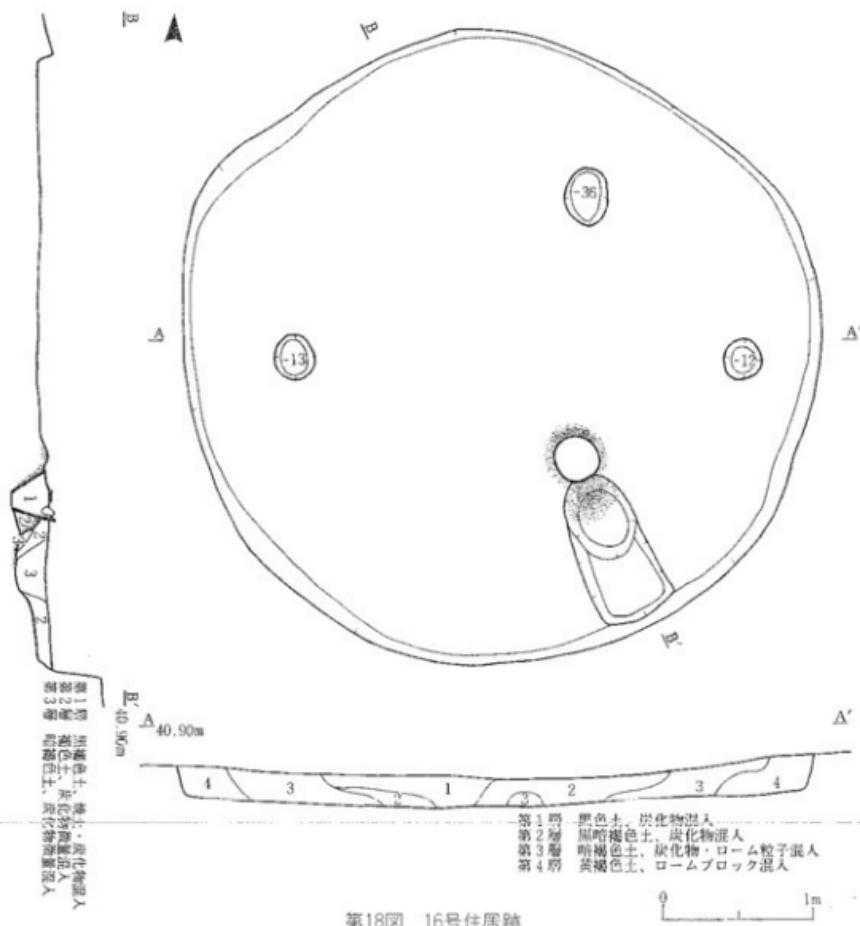
第15回 13号住居跡



いずれも覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するもので、136には刺突がみられる。

石器（第41図23・27）

23は石器、27は石棒の頭部である。



第18図 16号住居跡

19号住居跡（第21図）

調査区北東部、沢の縁辺部で検出された。

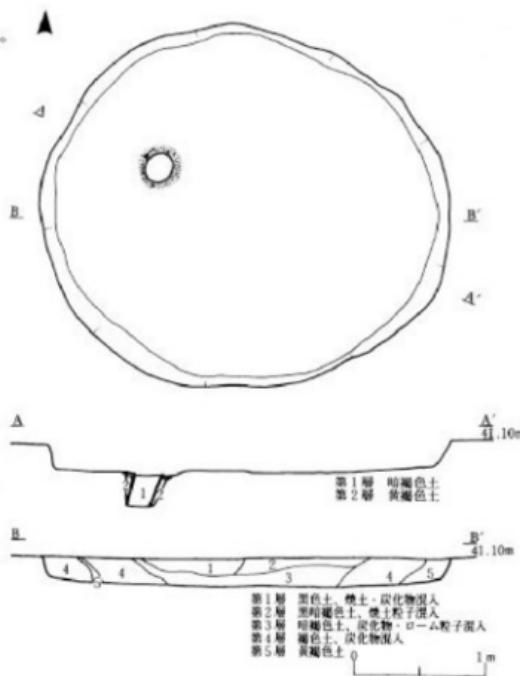
プランは長軸2.4m、短軸2mの椭円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1個のみの検出である。かは土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は石を底面のみに組むもので、底

面の石と側面の壁が、火熱を受けている。

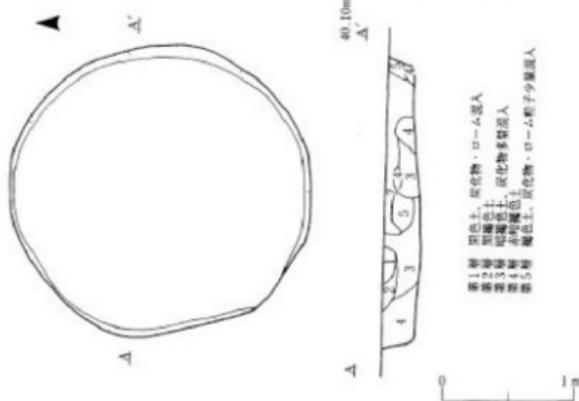
出土遺物

土器（第30図28、第36図
137～139）

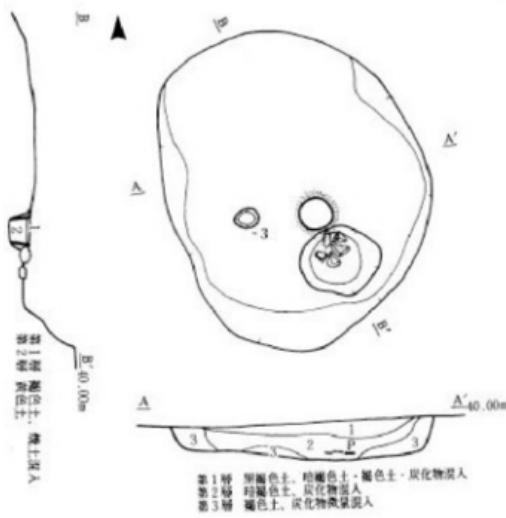
28は仰盤土器、他は腹
土出土である。28は深鉢形
土器の胴部で、地文はLR
単節斜繩文（縱位回転）で
ある。137・138は刺突が加
飾される。



第19図 17号住居跡



第20図 18号住居跡

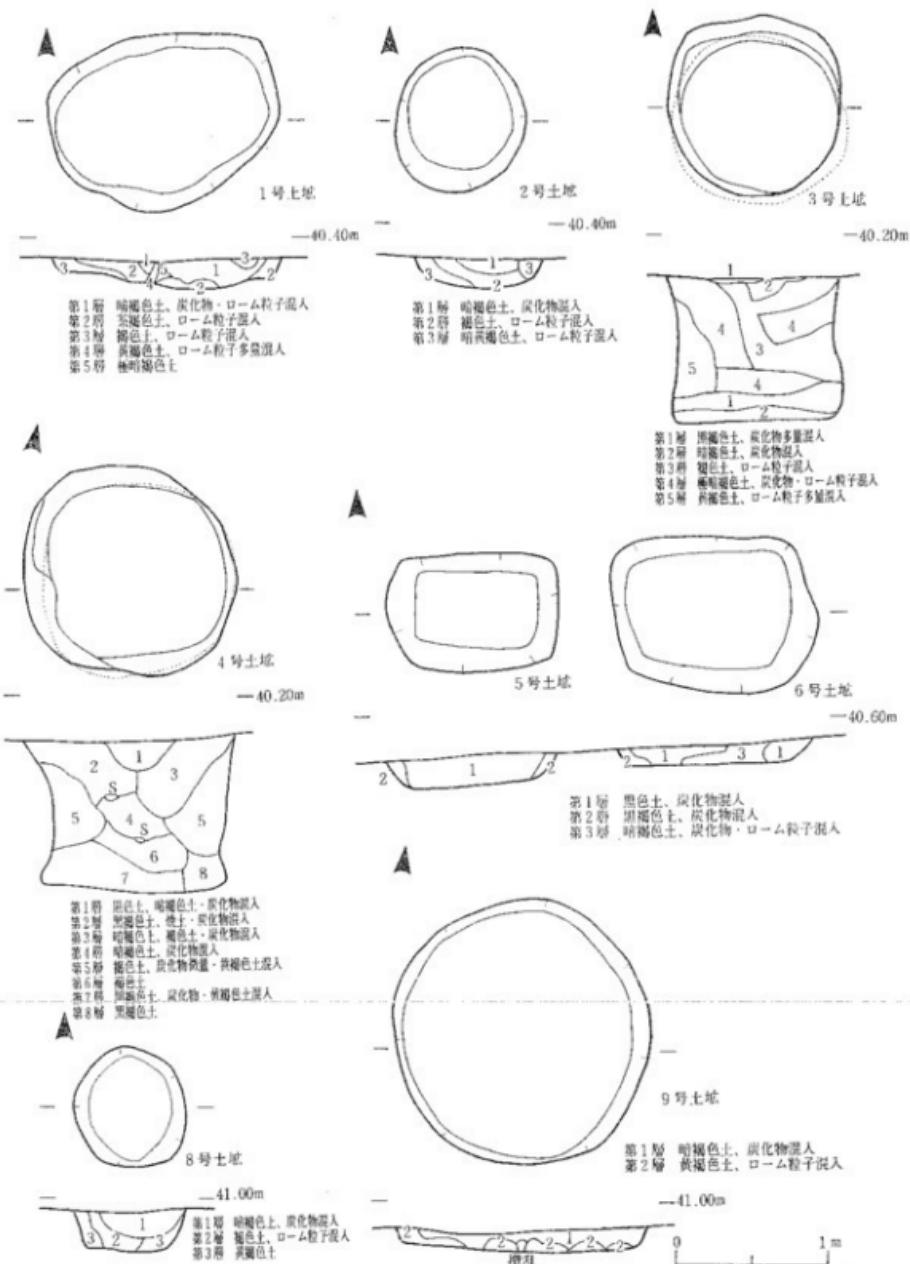


第21図 19号住居跡

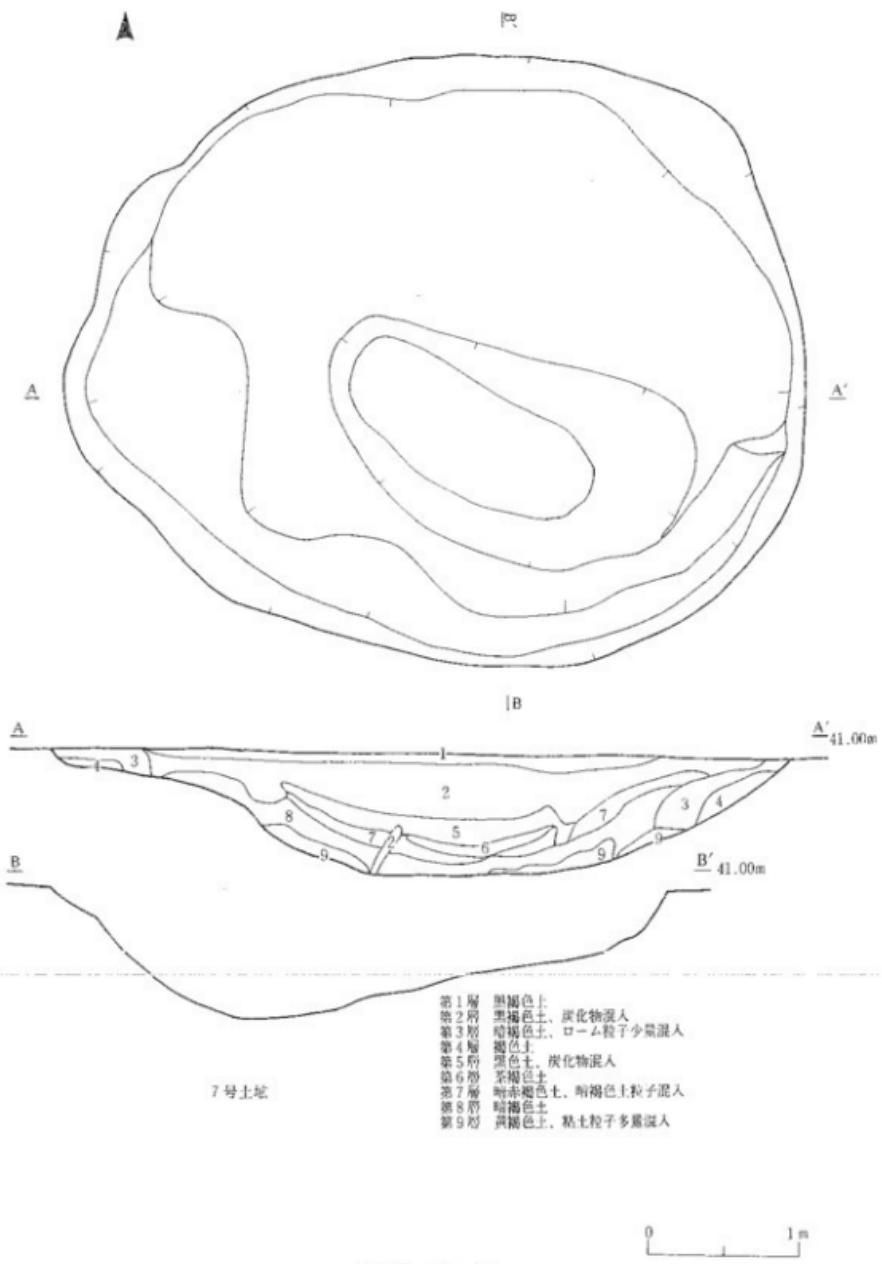
0 1m

土壤一覧表

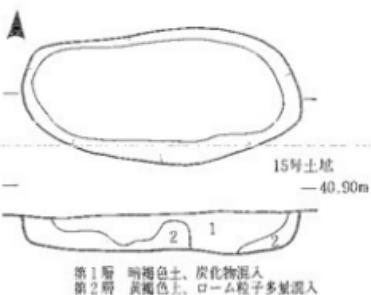
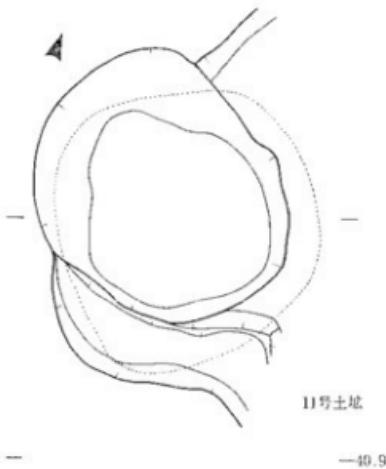
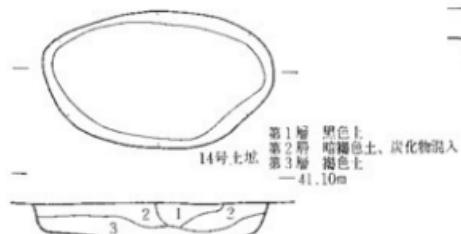
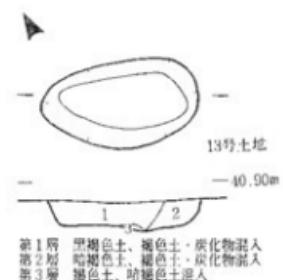
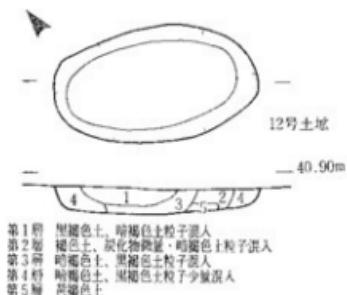
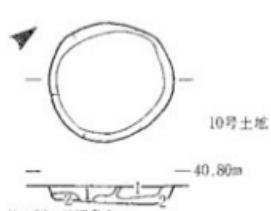
番号	規模(cm)			平面形	断面形	出土遺物	断面圖
	長軸	短軸	深さ				
1	155	118	20	梢円形	②	第36図140~143、縄文前期末(大木6式)	①
2	97	85	20	梢円形	①	第36図144、縄文中期(大木10式)	②
3	120	110	93	梢円形	④	第36図145・146、縄文	③
4	145		100	円形	④	第36図147、縄文中期末(大木10式)	④
5	112	80	20	長方形	②		
6	130	103	12	長方形	②		
7	490	405	82	梢円形	③	第36図148~153、縄文中期末(大木10式)	⑤
8	80	75	26	梢円形	②		
9	182		13	円形	②		
10	82		12	円形	②		
11	182	150	138	梢円形	⑤		
12	134	76	18	小判形	②		
13	105	58	15	梢円形	②		
14	153	92	25	小判形	②		
15	186	90	24	小判形	②		
16	205	112	35	小判形	②		
17	105	73	22	梢円形	②		
18	65	50	47	梢円形	①		



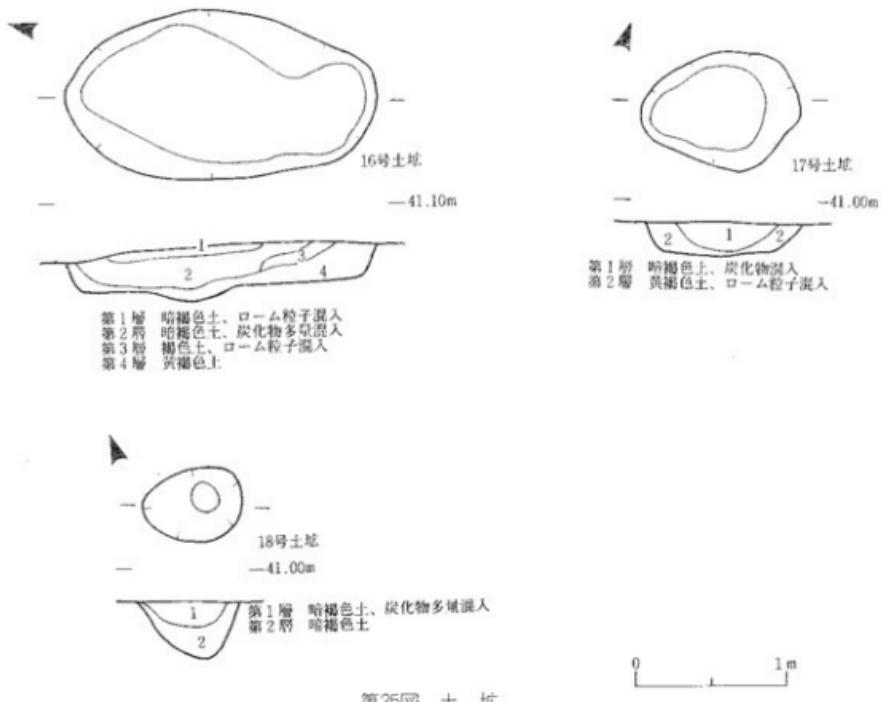
第22圖 土 壤



第23図 土 塚



第24図 土 塚



第25図 土 塙

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群、類に分けて述べてみたい。

1群土器（第31図34、第36図140～143）

細い粘土紐を直線、鋸歯状に貼り付け、平行する隆線に半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。

2群土器（第31図29～33、第37図154～161）

細い粘土紐を直線、円形、鋸歯状に貼り付け、半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。

A-1類（160）口縁部が直立する深鉢形土器である。

A-2類（156～158）口縁部が「く」の字状に内屈する深鉢形土器である。

A-3類（29～31）口縁部が大きく外反する深鉢形土器である。

3群土器（第31図35、第37図162）

細い粘土紐を直線、鋸歯状に貼り付け、連続爪形文を施さないものである。

A-3類（162）

口縁部がゆるく外反する深鉢形土器で、突起が付く。

4 群土器（第26～30図1～20・22～26・28、第31～36図36～61・63～139・144～153、第37・38図163～194）

地文を施した後に沈線区画の磨消帯を有するものである。磨消帯は「」字状、「U」字状、「S」字状、「O」字状、波状などがみられる。破線を施すもの、刺突を加飾するものなどもある。地文は単節、複節、無節斜縄文、撫糸文などで、口頭部に沈線を巡らし無文帯を作るもの、地文のみのものも含めた。

A－1類（16・43・68・69）

口縁部が直立する深鉢形土器である。68・69は磨消帯の幅が狭い。

A－3類（4～6・8～12・19・22・23・36～40・43～45・49～56・59・60・63～65・67・70・75～79・83・84・86・88・89・91・96～98・100～108・110・115～119・124・126・127・132・135～137・139・145・147・151・152・163～165・175～180・183～194）

口縁部が外反する深鉢形土器である。大きく外反するもの、ゆるく外反するもの、直立に近いものがある。平縁口縁が多く突起をもつものもある。

B－2類（14・57）

口縁部が内湾する鉢形土器である。14は胴部が、57は頭部が「く」の字状に折れる。

B類（15）

把手に孔をもつものである。

5 群土器（第29図21、第32図62）

刻線を葉脈状に施すものである。

B－2類（21）

II縁部が内湾する鉢形土器である。4単位の波状口縁をなし、磨消帯を施した後に刻線を湾曲させて施す。

6 群土器（第30図27）

A－3類

口縁部がやや外反する深鉢形土器である。地文である撫糸文を施した後に、鉤状に沈線区画の磨消帯を施す。

7 群土器（第38図195）

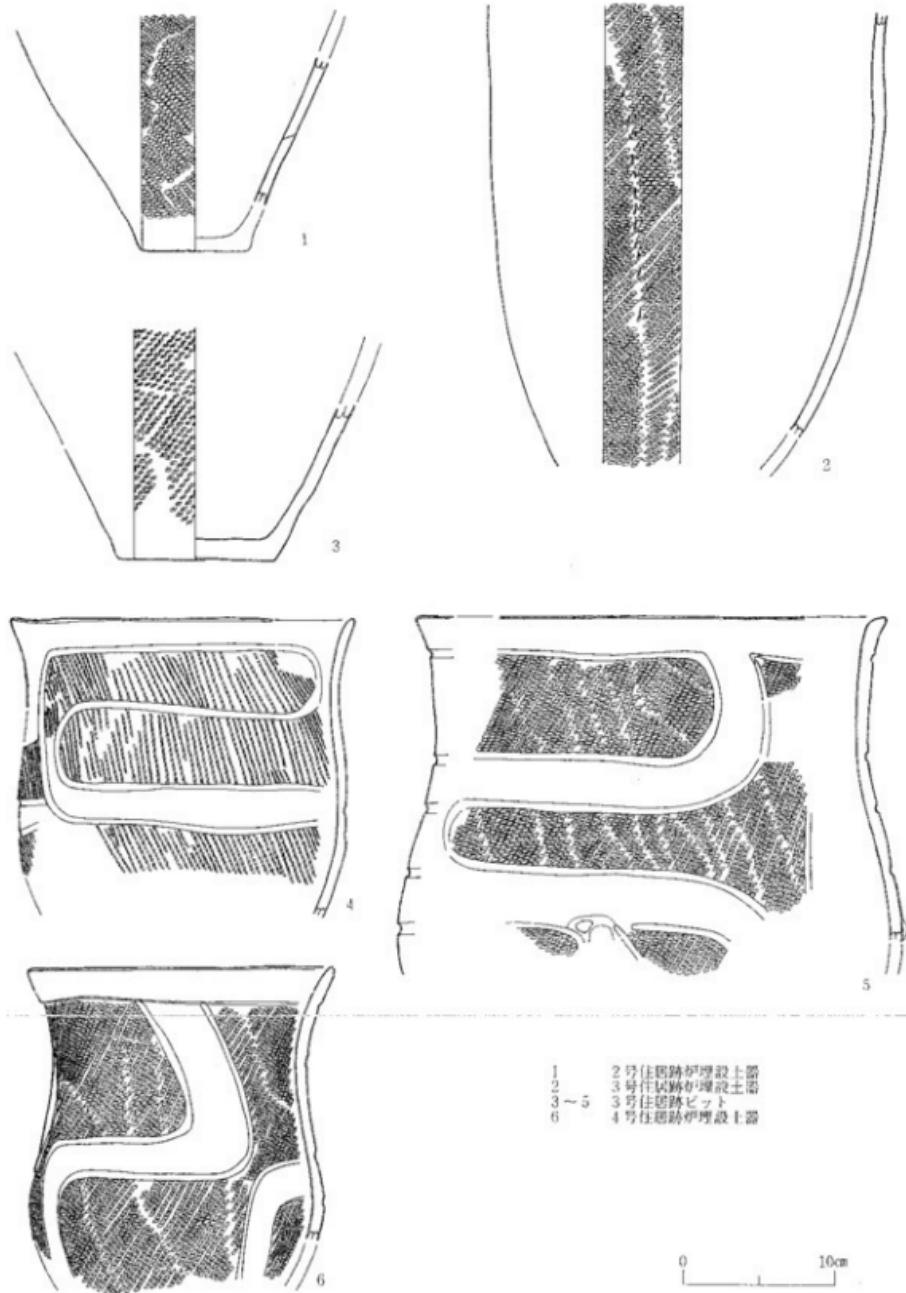
口唇部に小突起をもち、突起頂部下に刺突を施しし、その下に連鎖状文を施すものである。

8 群土器（第38図196）

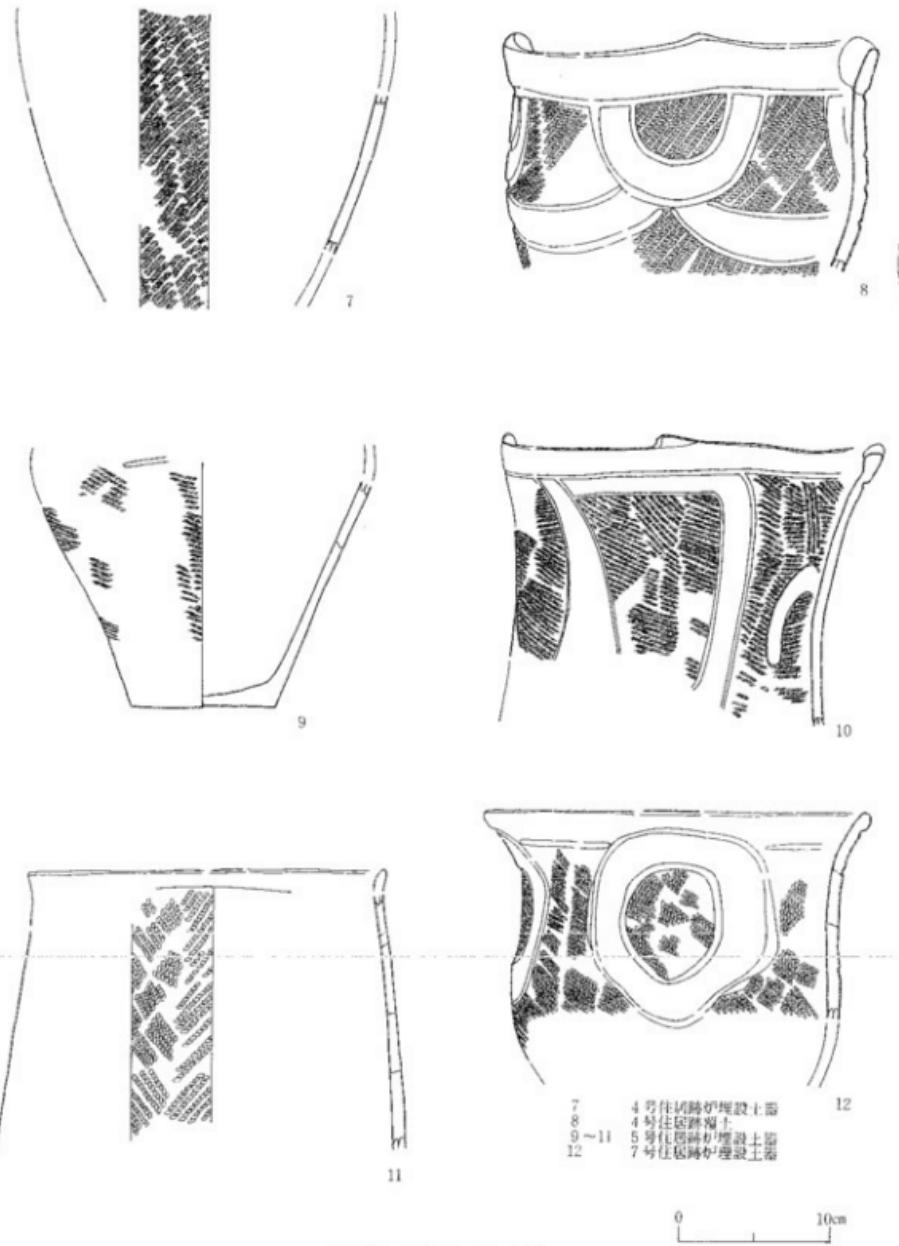
口縁部に平行沈線を施すものである。

9 群土器（第38図197）

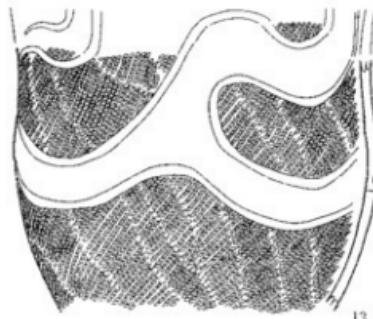
B－3類



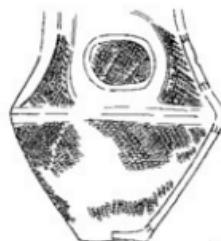
第26図 遷橋内出土土器



第27図 遺構内出土土器



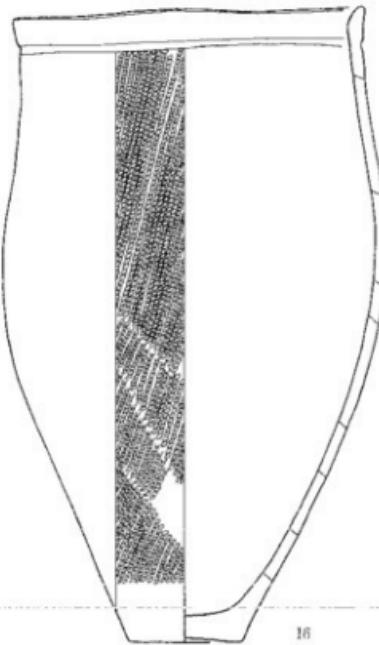
13



14



15



16

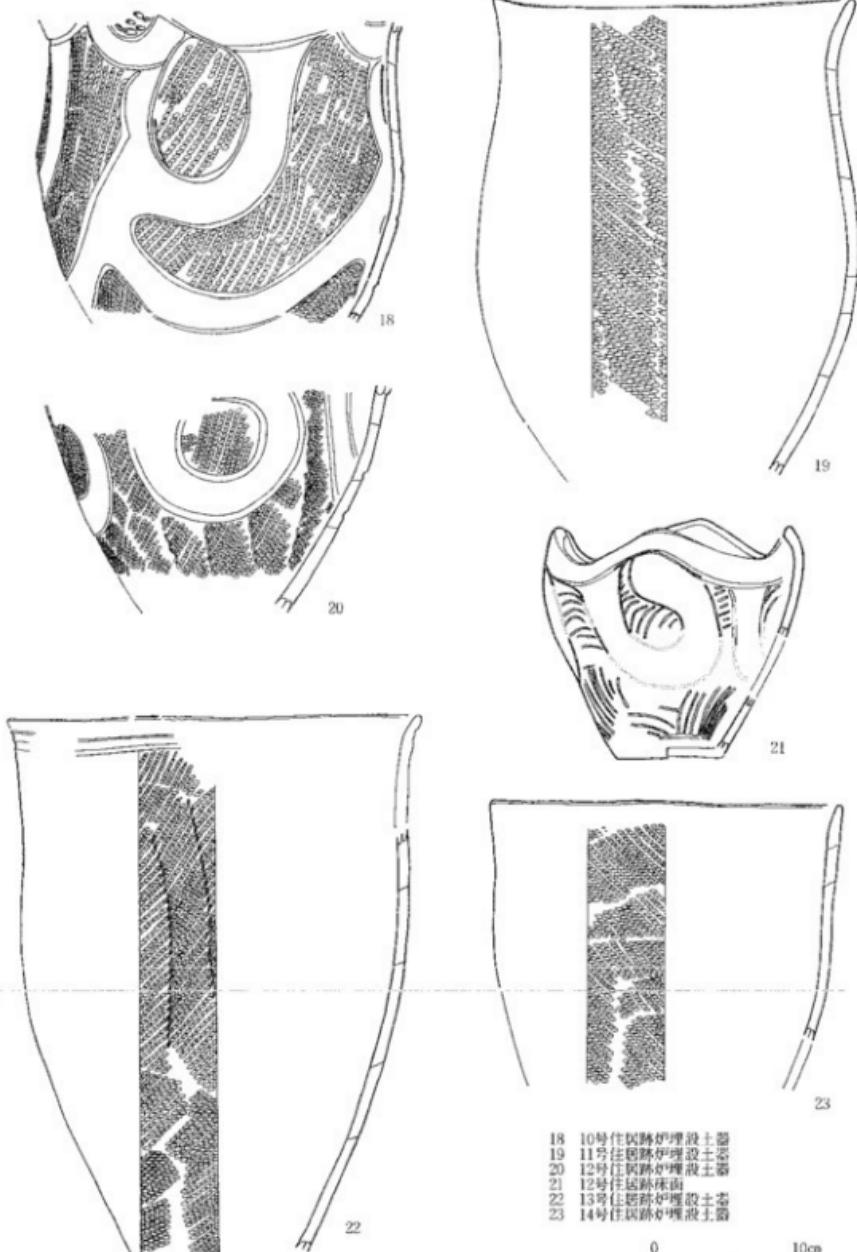


17

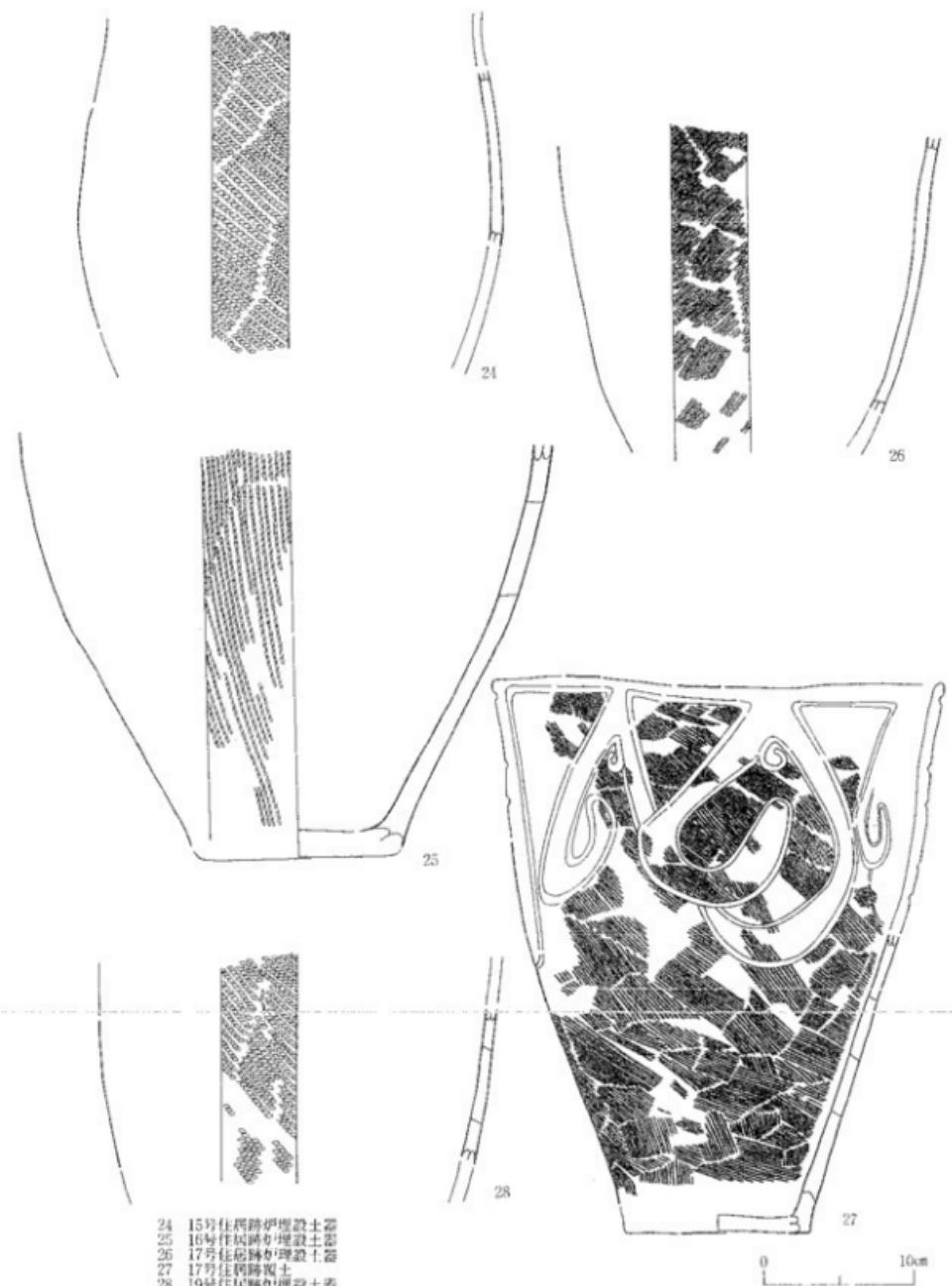
- 13 8号住居跡伊理設土器
14 8号住居跡床面
15・16 8号住居跡覆土
17 9号住居跡伊理設土器

0 10cm

第26図 遺構内出土土器

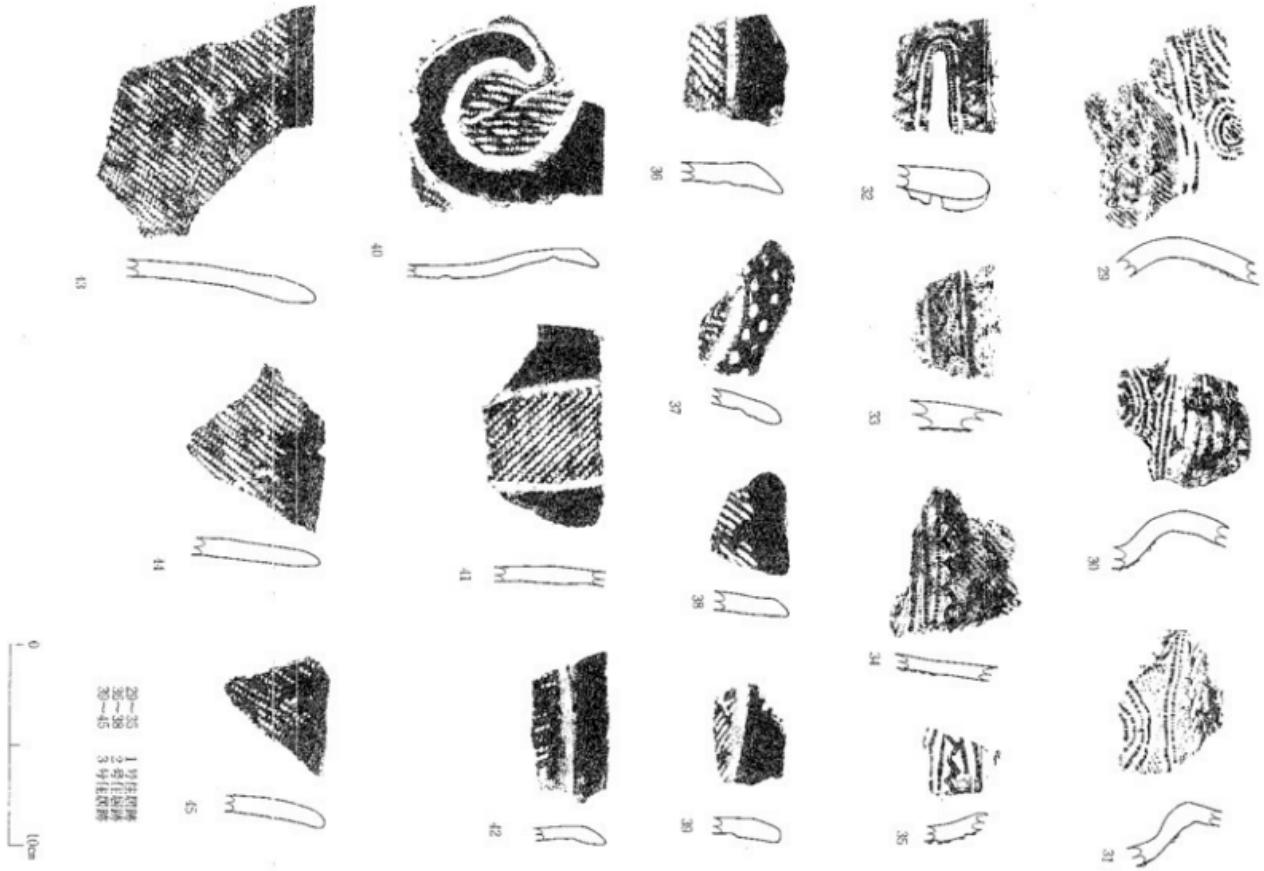


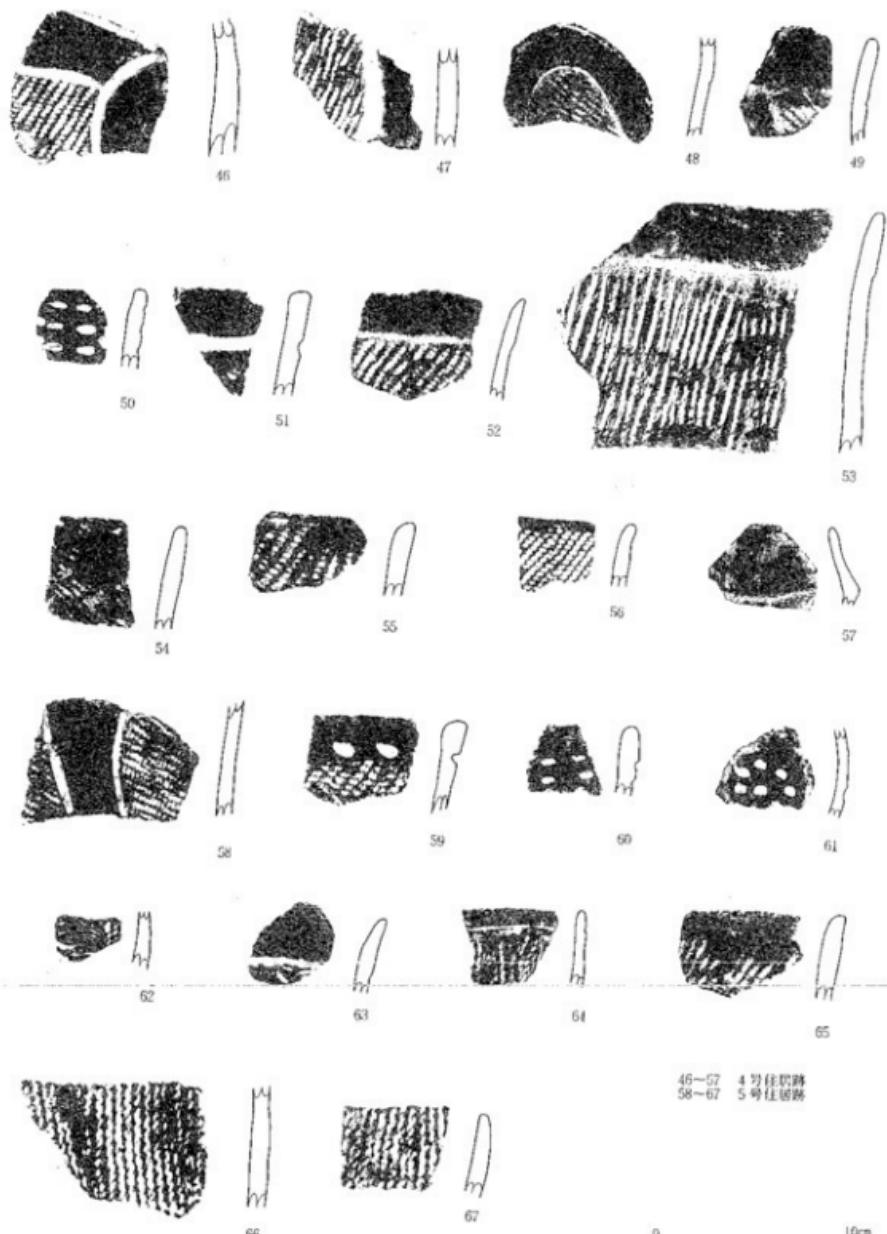
第29図 遺構内出土土器



第30図 遺構内出土土器

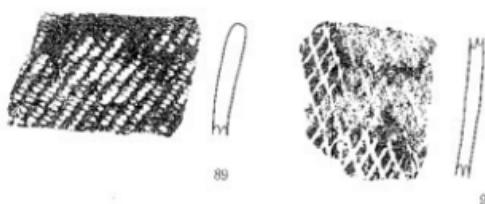
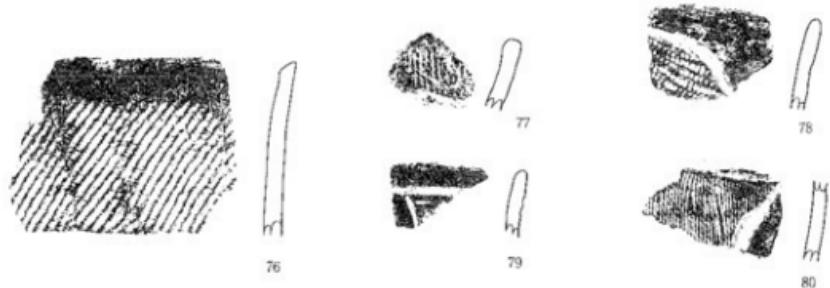
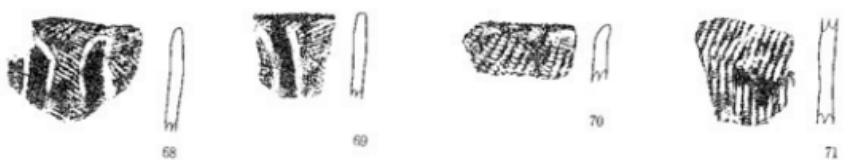
第31圖 遷橋內出土土器





46—57 4号住居跡
58—67 5号住居跡

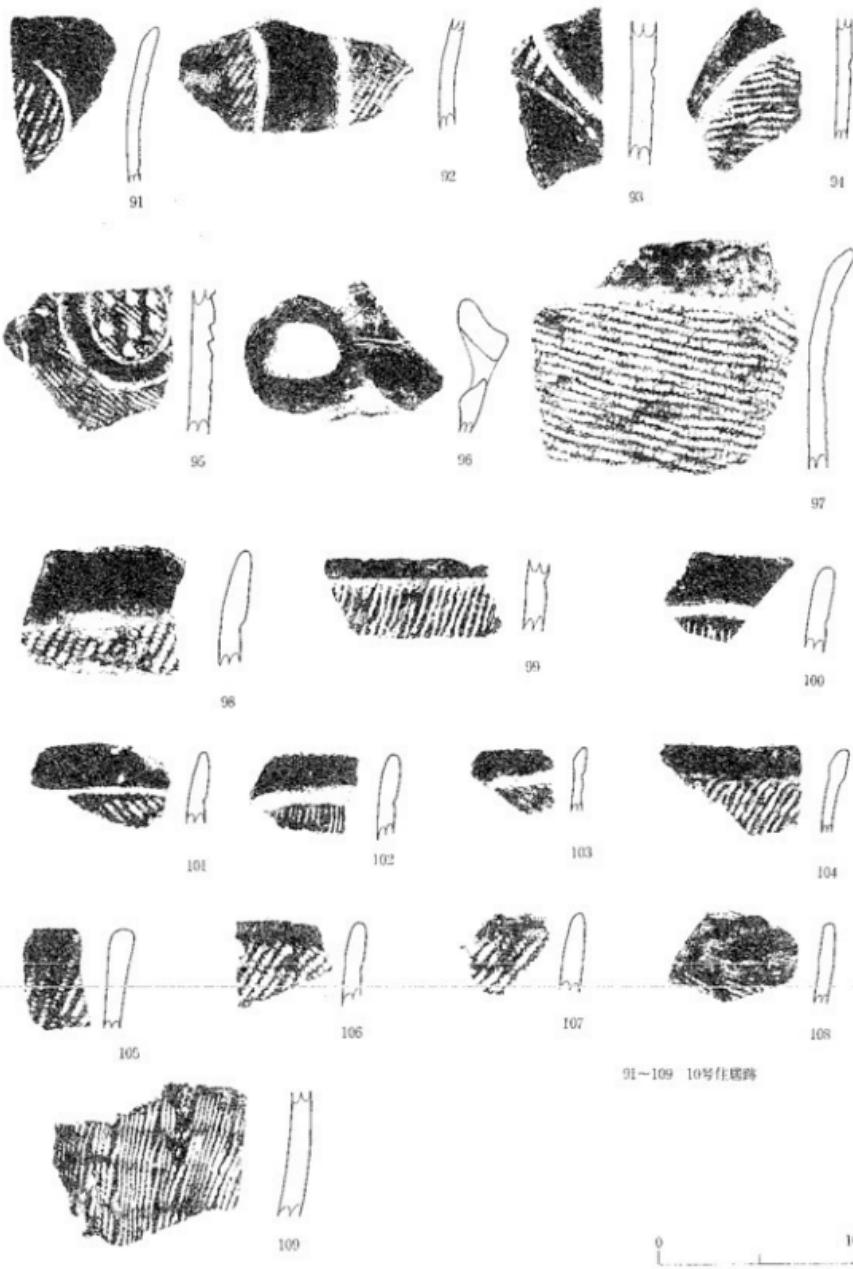
第32図 遺構内出土土器



68~72 6号住居跡
73~76 7号住居跡
77~84 8号住居跡
85~90 9号住居跡

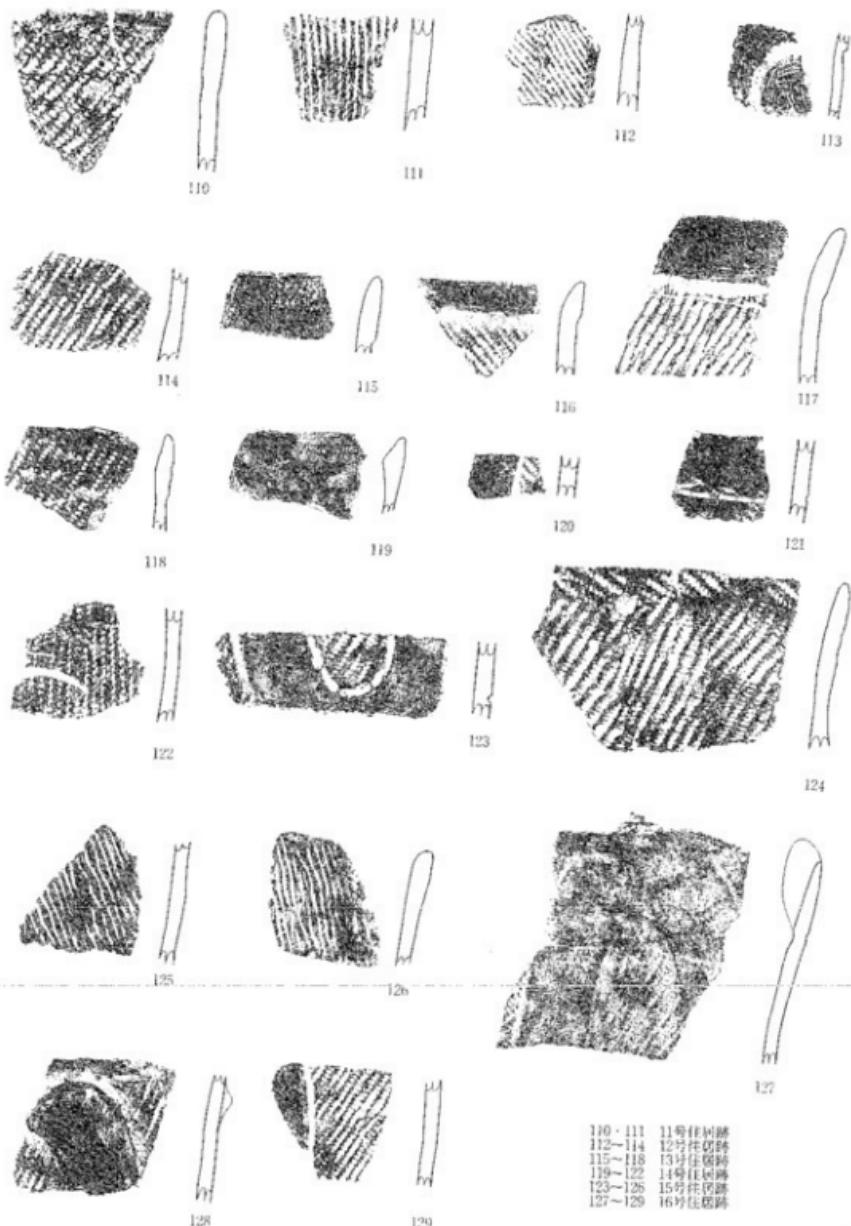
0 10cm

第33図 遺構内出土土器

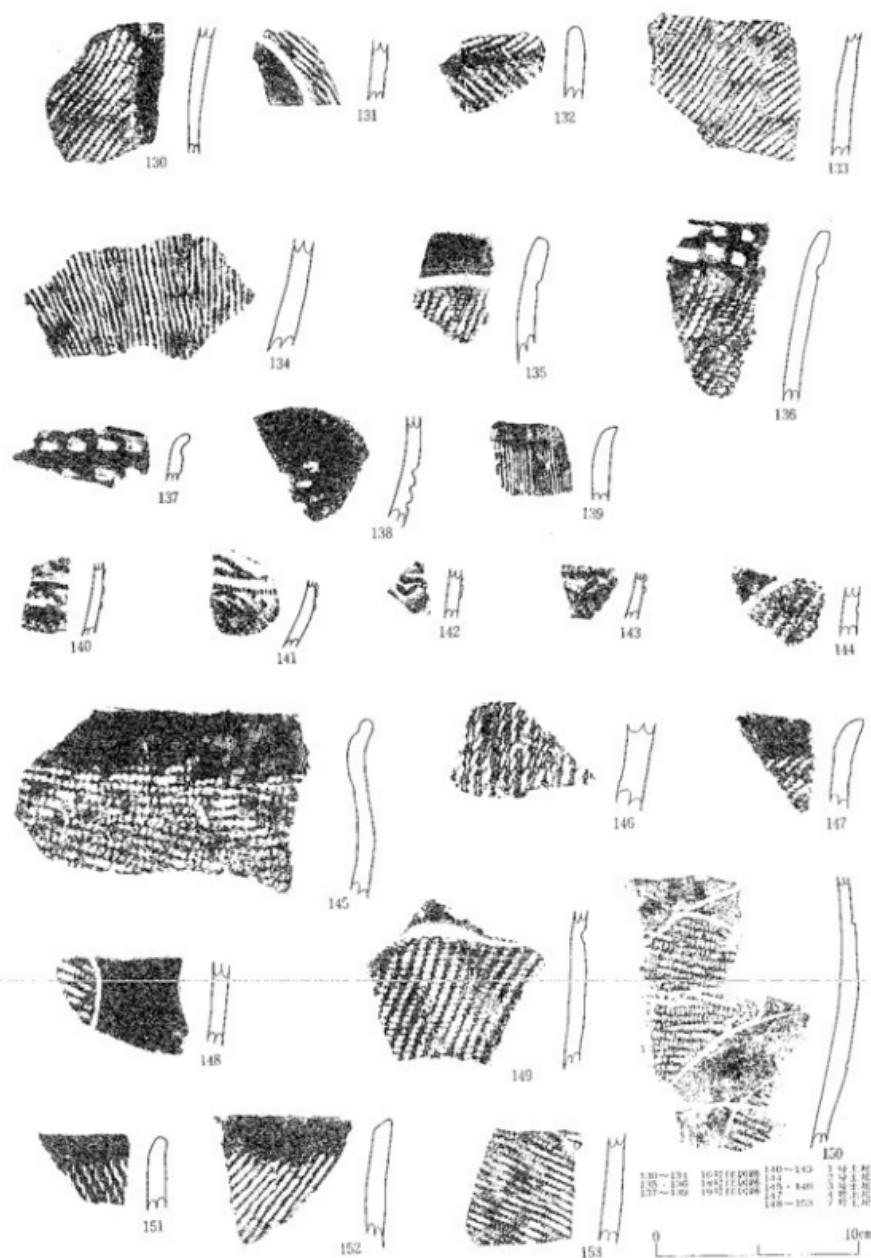


91~109 10号住居跡

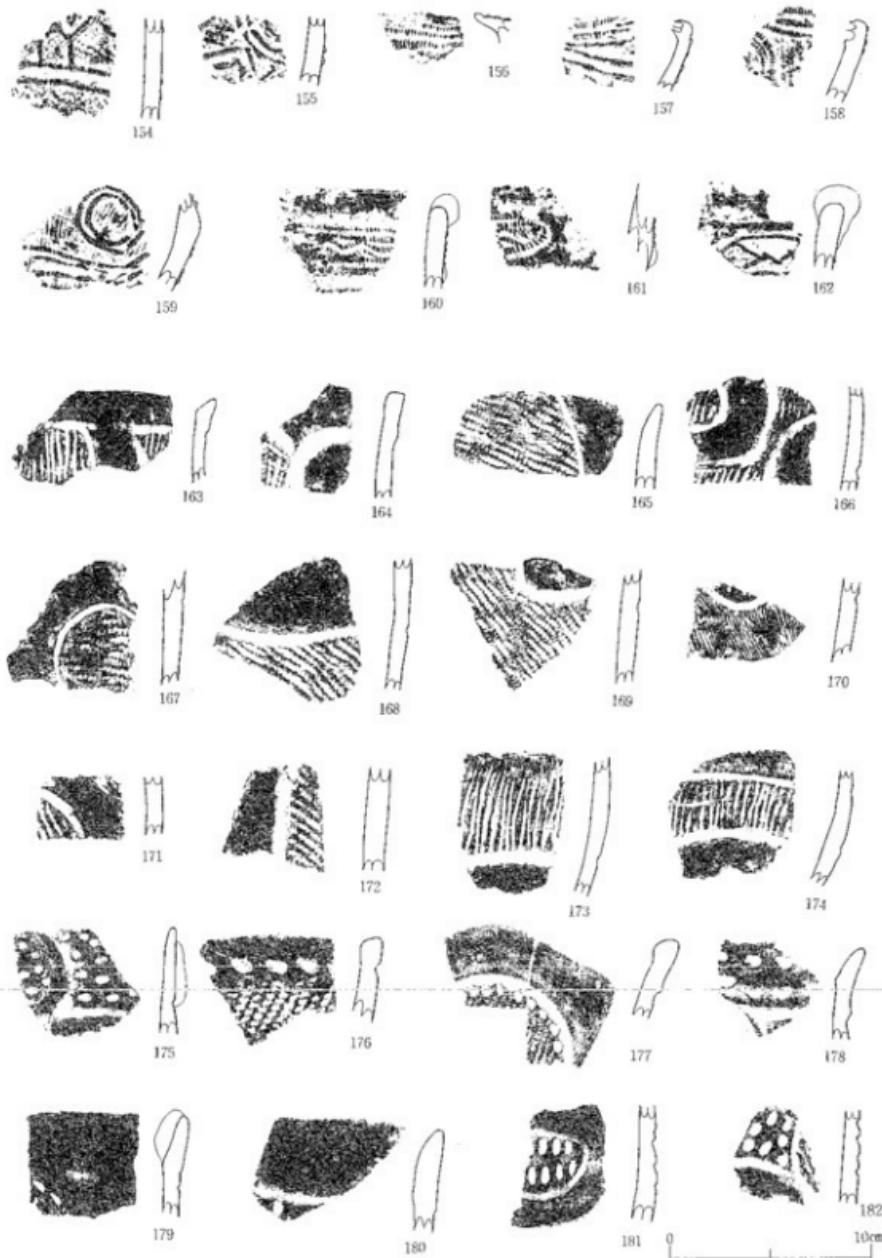
第34図 遺構内出土土器



第35図 遺構内出土土器

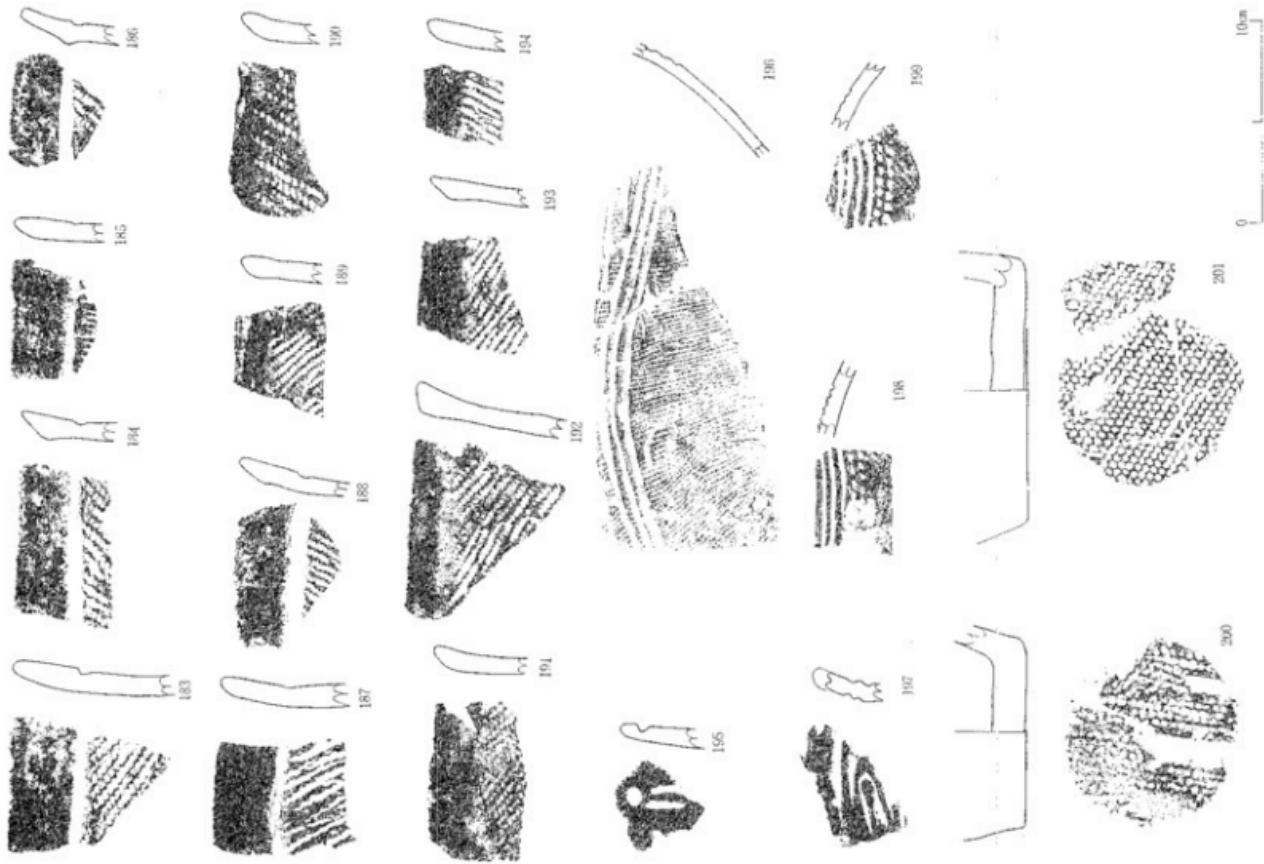


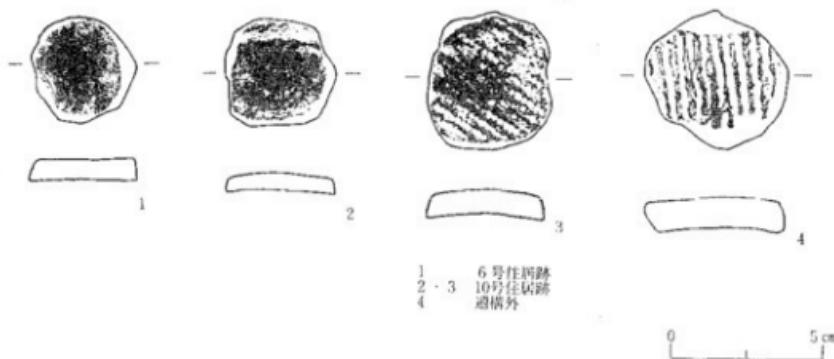
第36図 造橋内出土土器



第37図 造構外出土土器

第38图 遗物出土土器





第39図 土製品

小突起をもつ鉢形土器である。工字文を施し、小突起には刺突を施す。

10群土器（第38図198・199）

D類

いずれも壺形をなすもので、平行沈線と連続刺突文を施す。

土製品（第39図）

1～3は遺構内、4は遺構外出土の再利用土製品（円盤状土製品）である。土器片を利用したものである。

遺構外出土石器

石鎌（第42図28～30） 有基・無基のものがある。硬質頁岩製である。

石匙（第42図31～39） 線型をなすものであるが、36～39は三ヵ月状を呈する。硬質頁岩製である。

ヘラ状石器（第42図40～43） 40～42は両面加工、43は片面加工である。40を除いては斧としての機能も考えられる。硬質頁岩製である。

搔器（第42図44・45） 片面加工である。硬質頁岩製である。

削器（第42図46・47） 片面加工である。硬質頁岩製である。

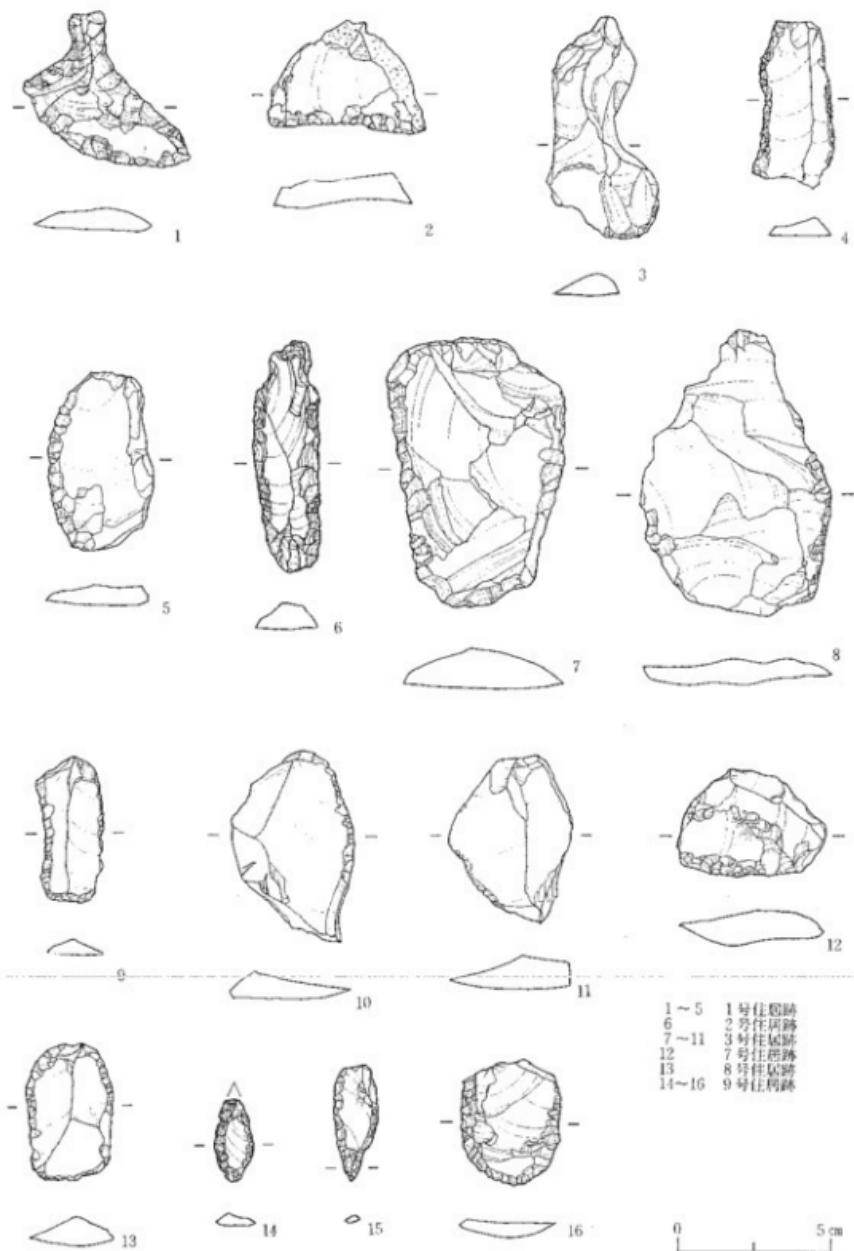
石鍤（第43図48・49） 両端を打ち欠くものである。

くぼみ石（第43図50～53） くぼみ部が複数あるもの、片面・両面のものがある。

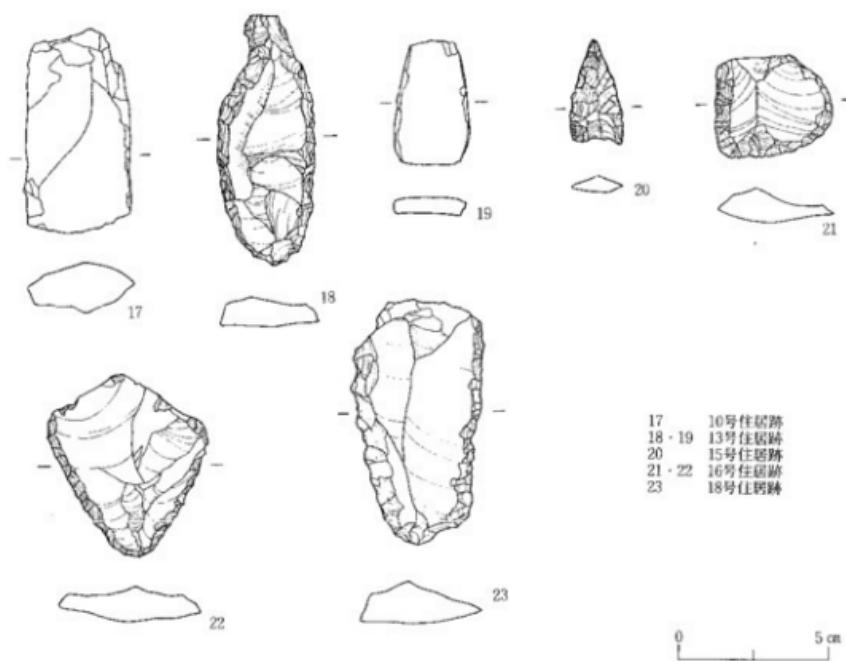
磨石・敲石（第43図54～57） 全面が磨かれるもの、側面に敲打痕の認められるものもある。

石皿（第43図58） 破損している。

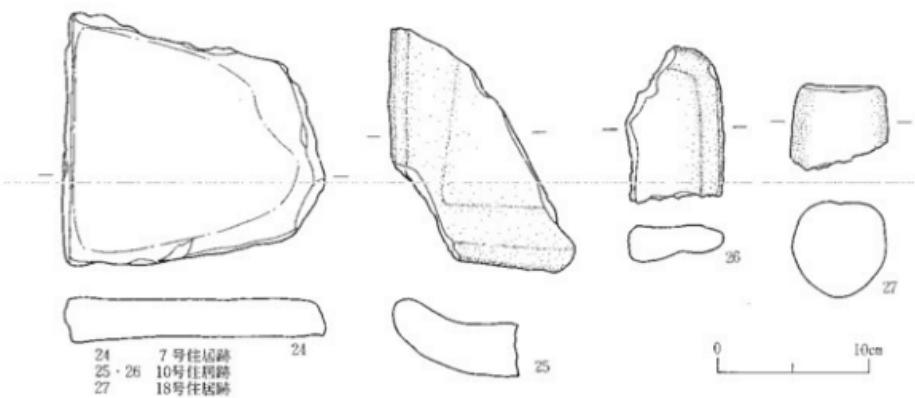
磨製石斧（第44図59～62） 59は小形磨製石斧である。破損しているものもみられる。凝灰岩製である。



第40図 遺構内出土石器



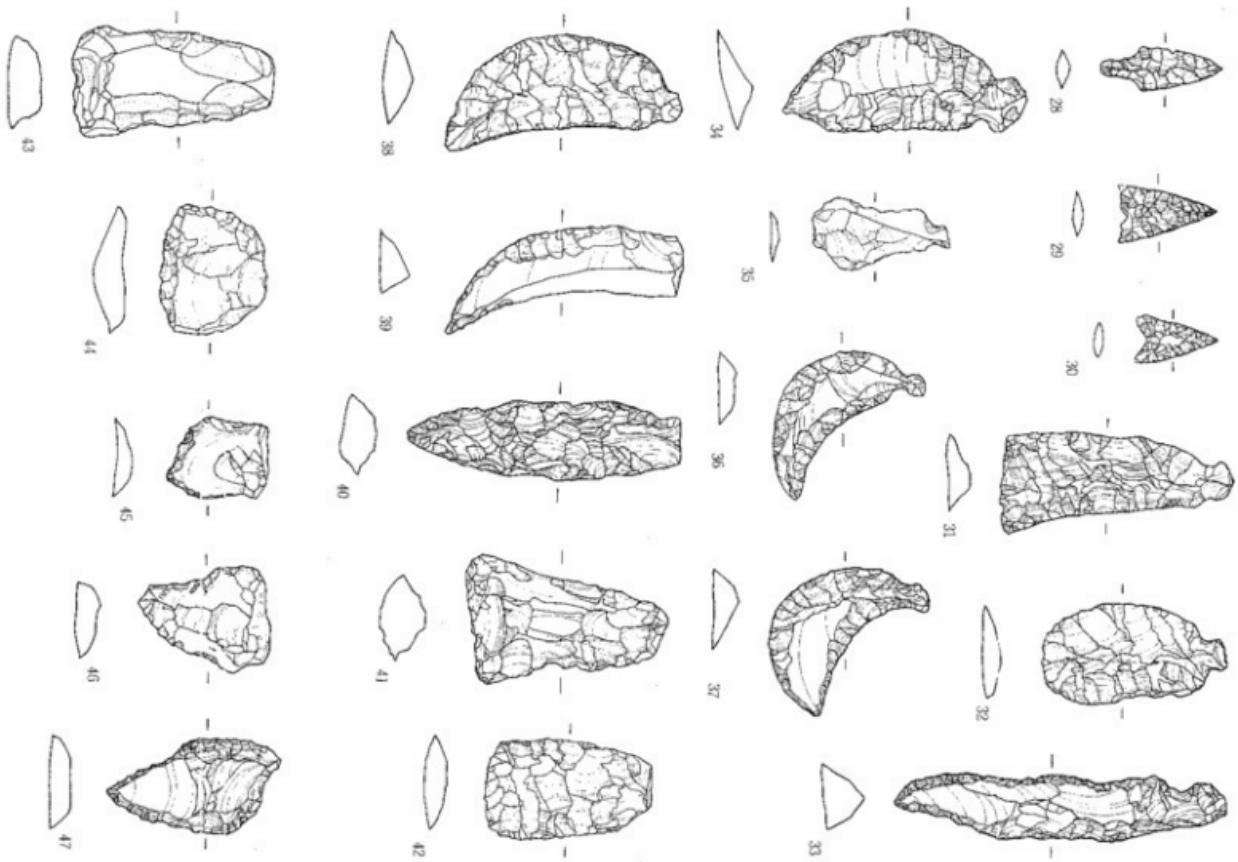
0 5cm



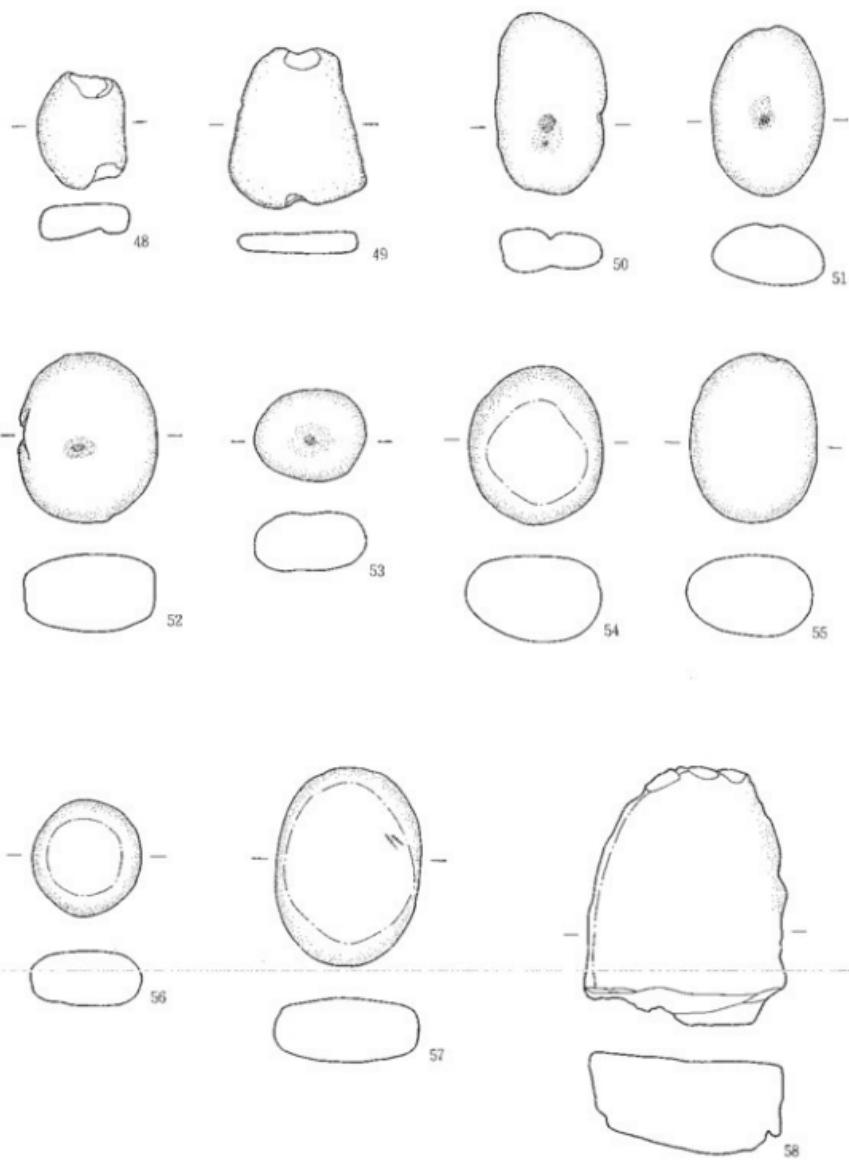
0 10cm

第41図 遺構内出土石器

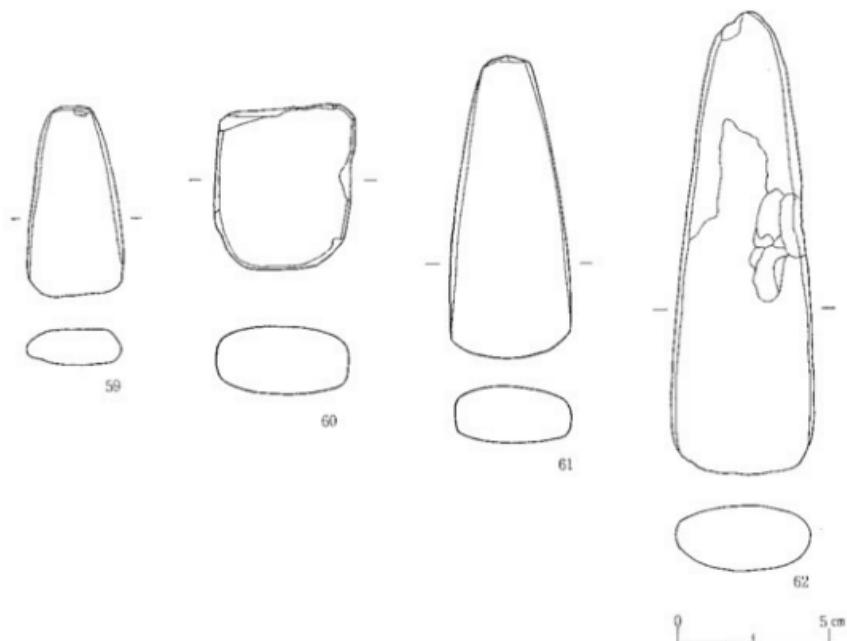
0 5 cm



第42图 通桥外出土石器



第43図 遺構外出土石器



第44図 遺構外出土石器

まとめ

調査の結果、堅穴住居跡19軒、土塙18基が検出された。これらは縄文時代前期末葉、中期末葉の時期のもので、中期末葉の遺構が主体をなす。遺物は縄文時代前期末～晩期のものが出土している。

遺構について

住居跡は19軒検出され、内訳は縄文時代前期末葉（大木6式期）のものが1軒（1号）、その他は中期末葉（大木10式期）のものである。土塙は出土遺物から時期の判明するものは前期末葉1基（1号）、中期末葉3基（2、4、7号）である。中期末葉の住居跡18軒について記述する。

平面形と規模

平面形は橢円形を呈するものが9軒、ついで円形8軒、隅丸方形1軒であり、ほとんどが円形を基本とする。

規模は径2m～5mで、最小が11号住居跡の長軸2m（橢円形）、最大が13号住居跡の径5.8m（円形）である。3～3.5mの規模の小形、中形のものが多い。

炉

炉の形態は、地床炉（6号）、土器埋設炉（9、11、12、17号）、石凹土器埋設炉（15号）といわゆる複式炉からなり、複式炉は、^{石凹}_{土器埋設部}+^{土器}_{組部}+^{石凹}_{掘り込み部}で構成され、それぞ

れの組み合わせにより 4 タイプに分類される。

土器埋設部十掘り込み部（4、7、13号）

土器埋設部十掘り込み部十掘り込み部（3、10、16号）

土器埋設部十石組部（8、14、19号）

石囲土器埋設部十石組部（2、5号）

9、11、12、17号住居跡の土器埋設部の埋設土器は全て斜位に、15号住居跡の石開土器埋設炉の土器は正位に埋設されている。

複式炉の埋設土器は 2 ~ 3 重に据えるものもあり、同一土器、異なる土器を使用するものがある。複式炉の石組部はほとんどが底面、側面に火熱を受け、石組部を構成する石は火熱で赤変しているもので、石を抜いたものも認められる。一段浅い掘り込み部は 3、10、16 号住居跡に見られ、住居壁に接するもので火熱は受けていない。炉の位置は住居の中軸線上にあり、住居壁に寄って構築される方向は南 5 軒、南西 3 軒、南東 3 軒、東 4 軒、北西 1 軒で土器埋設炉は東方向が多く、複式炉は南方向が多い。

柱穴

柱配置がはっきりしない住居跡が多く、主柱穴を確認できたのは 2、3、9、10、13 号住居跡で、4 ~ 5 本と考えられ、住居中軸線上にはほぼ対称的に配置される。同台地上に所在するこの時期の小形住居跡の柱穴は明確でない場合が多く、住居規模と関連するものと考える。

本遺跡の住居は北側の沢に沿って構築され、切り合い関係はない。出土遺物、炉の形態、埋設土器等から縄文時代中期末の大木 10 式期の限定された時期の集落であり、本道跡の南東約 300m に位置する「下堤 E 遺跡」、南約 300m に位置する「下堤 O 遺跡」は同時期を主体とする遺跡で、いずれも沢縁辺部に営まれた集落である。開発計画地域内の全遺跡の調査は終了していないが、集落の規模を別にして点在する 11ヶ所の遺跡が縄文時代中期末に属し、この期の集落の在り方を解明する資料が数いつつあると言える。

遺物について

出土した遺物は、土器、土製品（円盤状土製品）、石器（石鏃、石錐、石匙、ヘリ状石器、搔器、削器、磨製石斧、石鍤、くぼみ石、磨石、敲石、石皿）等である。以下は土器について述べてみたい。

1 ~ 3 軒は縄文時代前期末葉の土器である。細い粘土紐を直線・円形・鋸歯状に貼り付け、1群は平行する隆線に連続爪形文を、2群は全ての隆線に連続爪形文を施し、3群の隆線には連続爪形文を加飾しないものである。器形は深鉢形で、口縁部は直立（1点）、内湾（3点）、外反（4点）するものである。大木 6 式土器に比定される。

4 ~ 5 群は縄文時代中期末葉の土器である。4群は本道跡で土器をなす土器で、縄文施文後に沈継区画の磨削帯を施すものである。

磨消器は比較的バラエティーに富み、横位方向へ展開するものが多い。器形は深鉢形が最も多く、鉢形も數点みられる。深鉢形土器の口縁部は外反するものがほとんどである。大木10式土器に比定され、比較的古い時期の坂ノ上A 1群^(註2)が主体である。5群は葉脈状文を施すものである。大木10式土器に比定され、比較的新しい時期で、坂ノ上A 2群^(註3)に類似がみられる。

6・7群は縄文時代後期初頭の土器である。2点のみの出土で、磨消手法、連鎖状文を施すものである。

8～10群は縄文時代晚期の土器である。8群の196は平行沈線を施す鉢形土器で大洞C₂式、9群の197は工字文を施す鉢形土器で大洞A式、10群の198・199は数本の平行沈線がみられ工字文を施すと考えられ大洞A式土器に比定されるものであろう。

註

註1 秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上E遺跡」

1984

註2 秋田市教育委員会：「小阿地坂下堤遺跡発掘調査報告書」 1976

註3 註2と同じ

参考文献

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 1984

鹿角市教育委員会：「天戸森遺跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料26 1984

丹羽 茂：「大木式土器」 縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣出版 1981

日高吉明：「住居のか」 縄文文化の研究8 社会・文化 雄山閣出版 1982

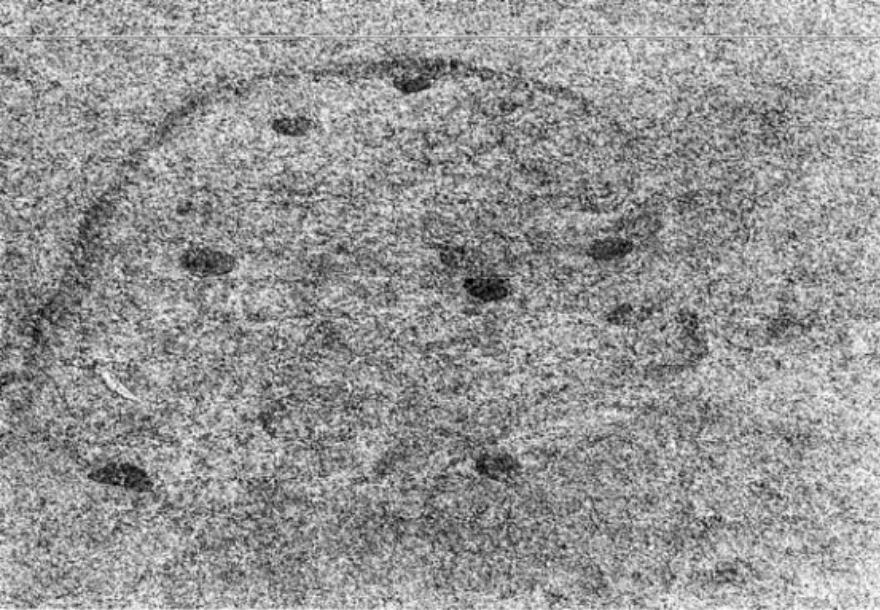


調査区全景（南→）

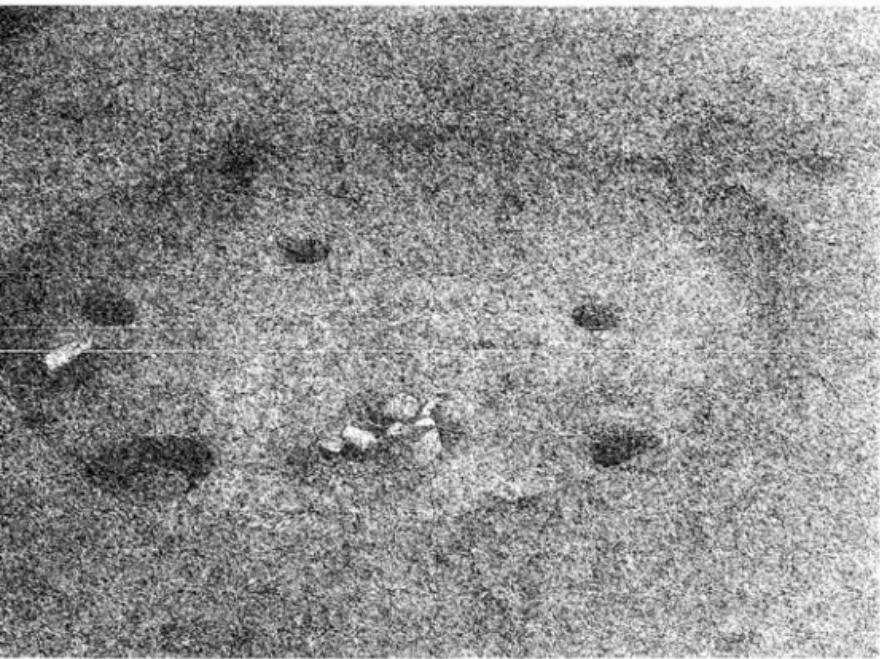


調査区全景（東→）

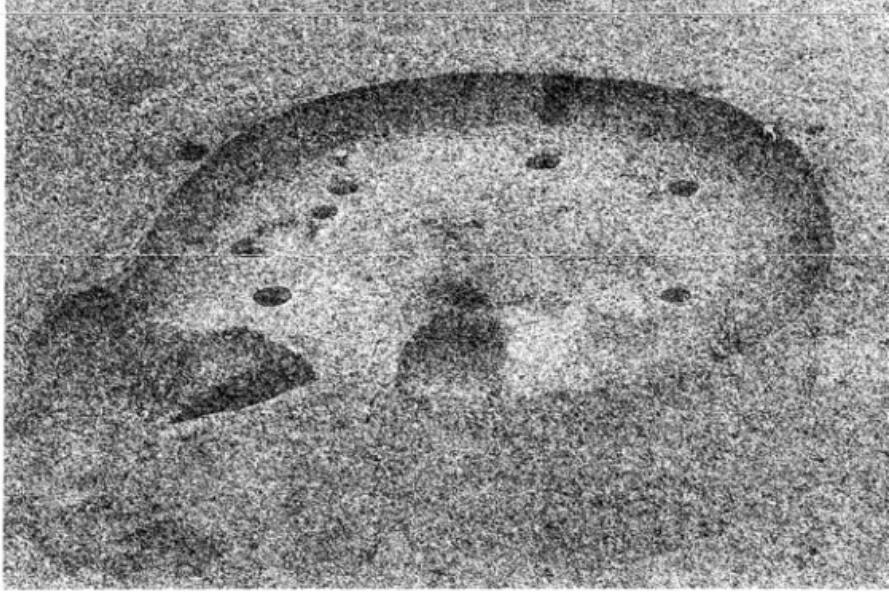
図版1



1号住居跡（南→）



2号住居跡（南→）



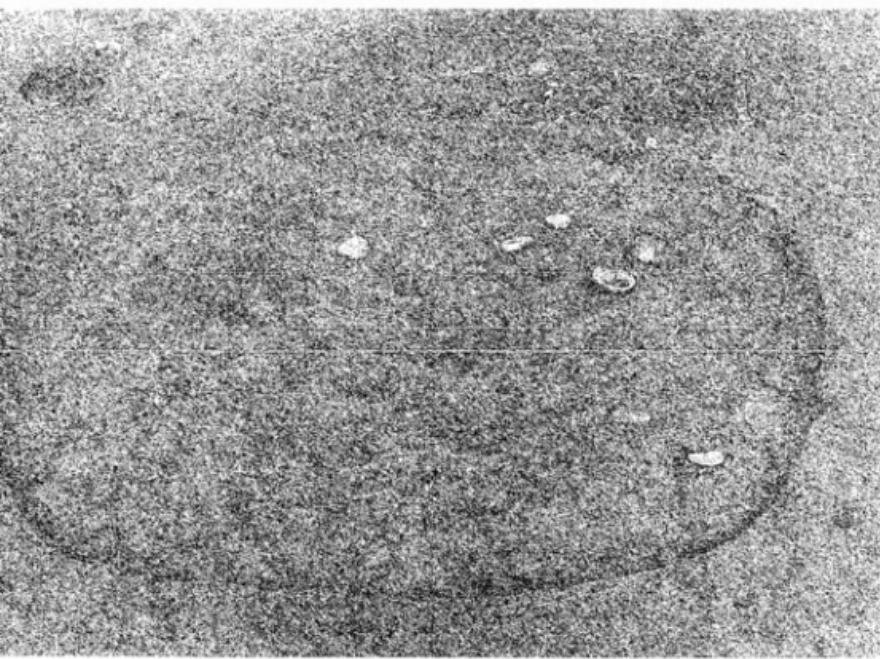
3号住居跡（南→）



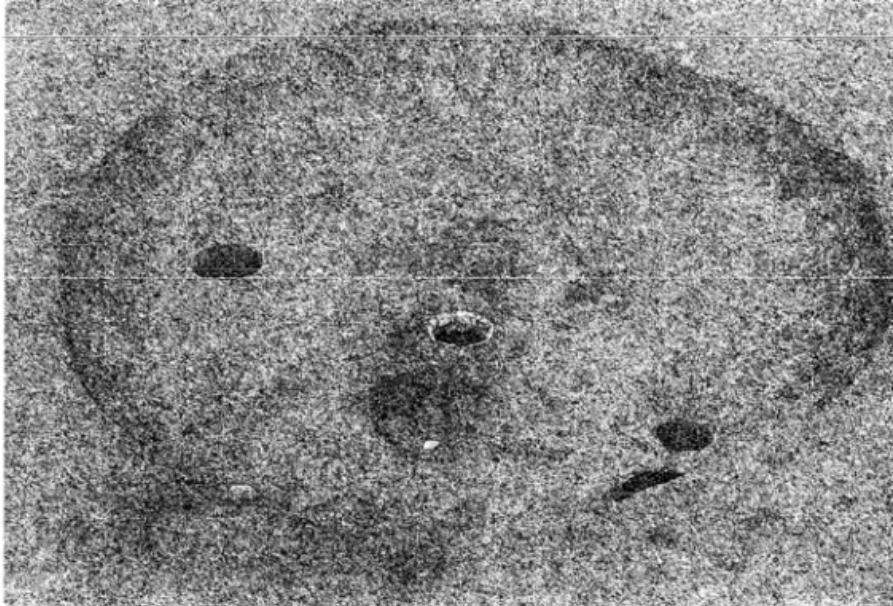
4号住居跡（南→）



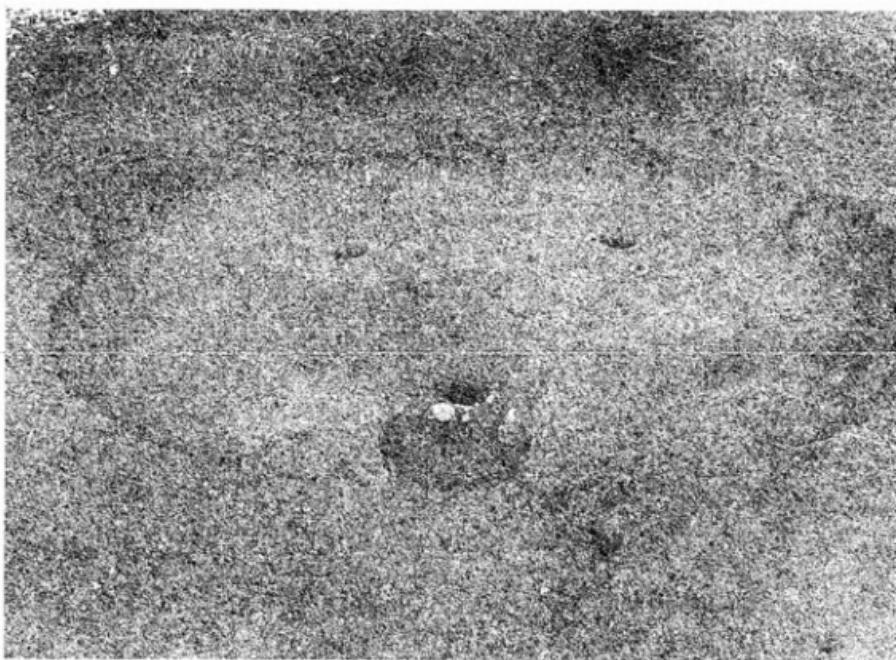
5号住居跡（東→）



6号住居跡（南→）



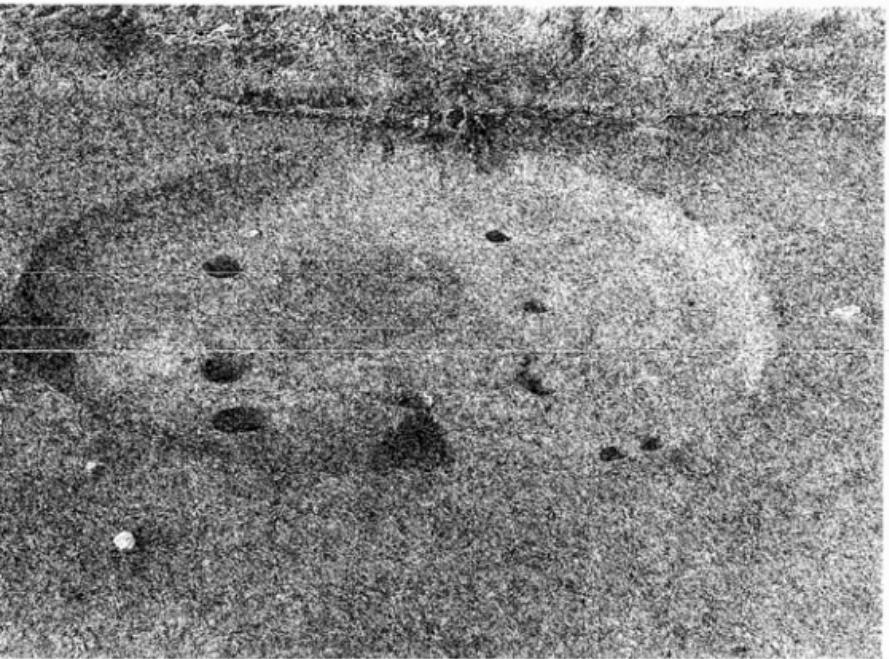
7号住居跡（南→）



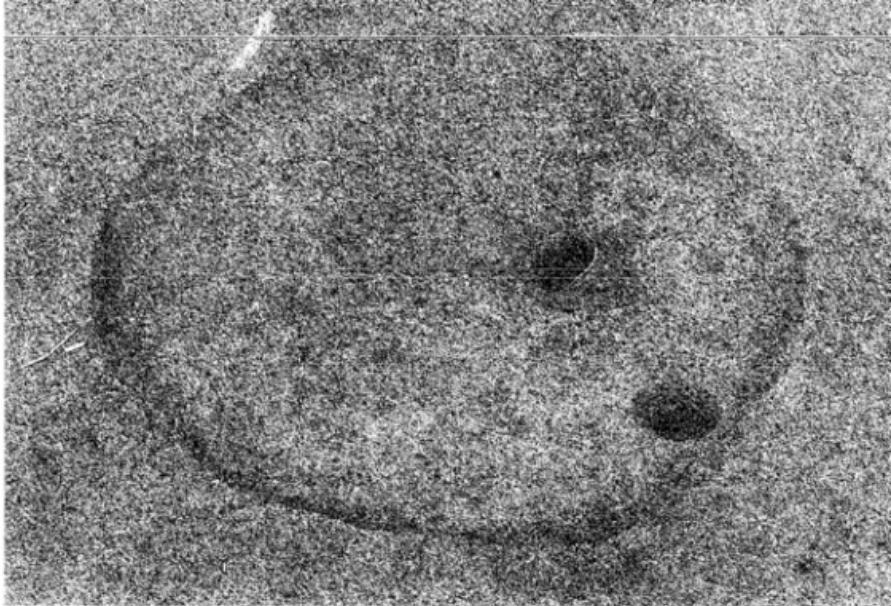
8号住居跡（南→）



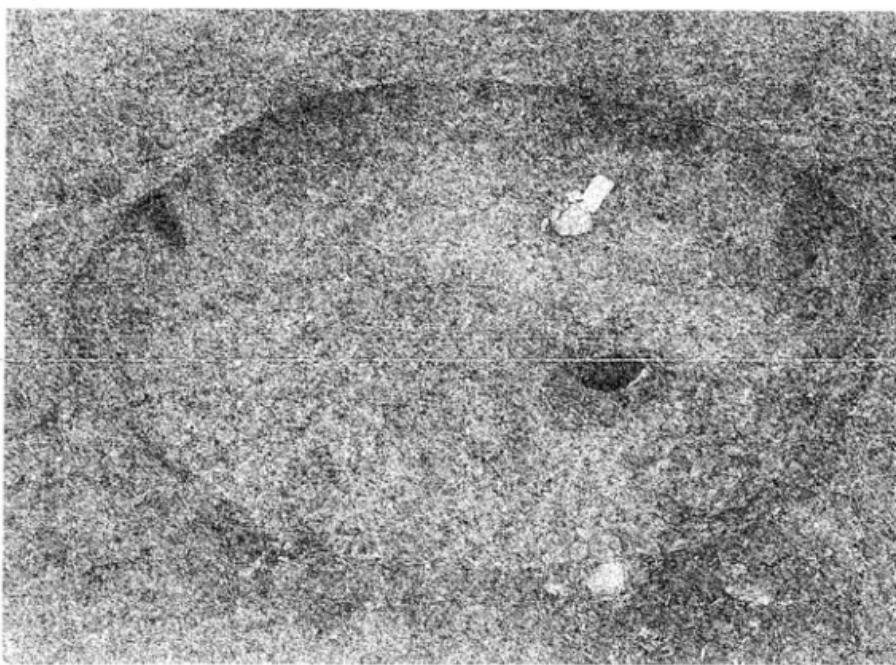
9号住居跡（東→）



10号住居跡（南→）



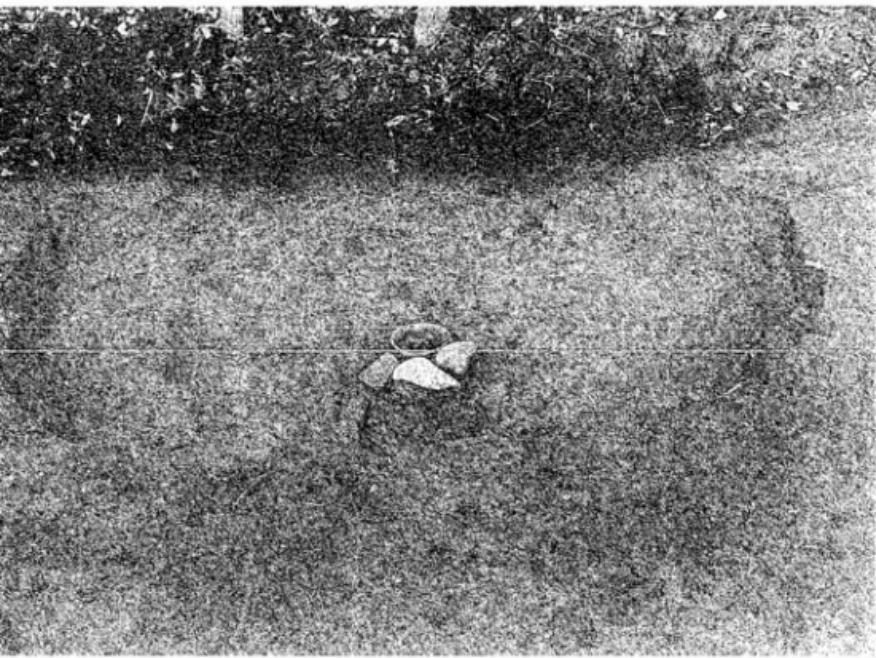
11号住居跡（南→）



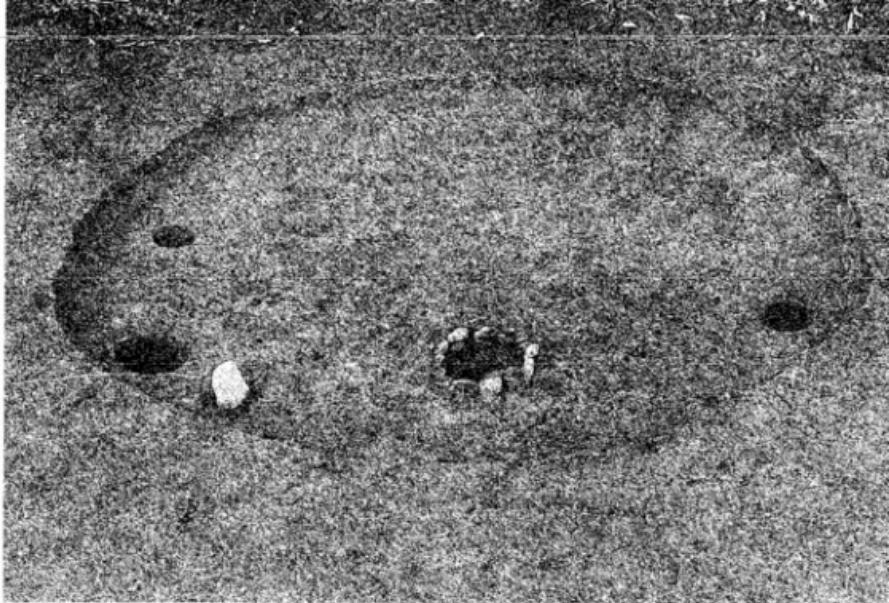
12号住居跡（南→）



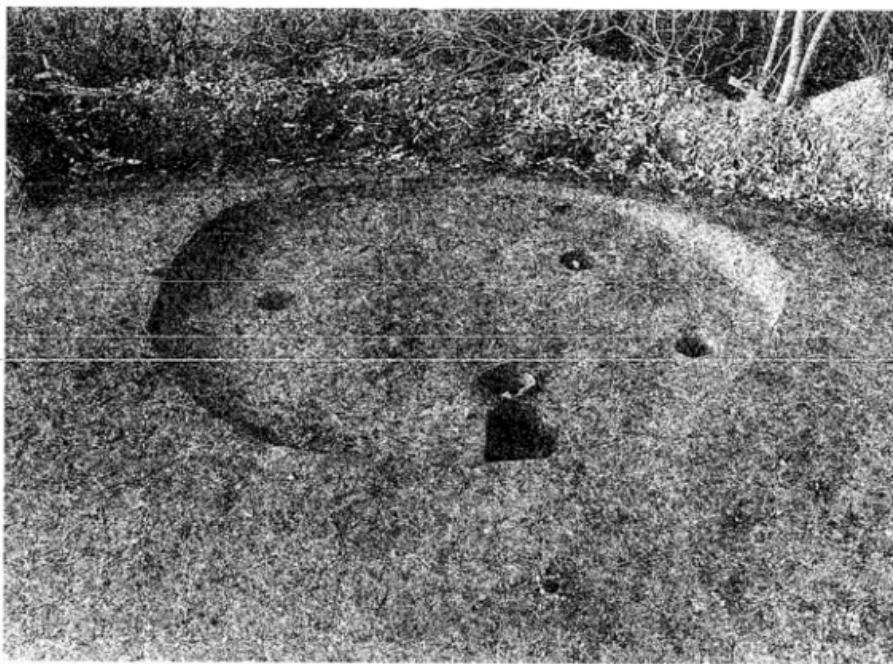
13号住居跡（南→）



14号住居跡（南→）



15号住居跡（南→）



16号住居跡（南→）